
W.C. ~War Closet~

坂井悠二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W. C. ~ War Closet ~

【Nコード】

N6992S

【作者名】

坂井悠二

【あらすじ】

十数年前、不良の巣窟なる学校が都会には多数存在していた。それは一種の社会現象でありある意味の流行でもあったのだが、そのようなブームはとうの昔に過ぎ去っている。

そして現在、地方の田舎町ではその流行の波がひと遅れして到着し――

彼らが通う中学校では、不良行為が多発するのであった。

その中学校のとあるクラスでは今日の時点で各グループが形成さ

れており、いじめが多発していた。

横暴な男子生徒の集うグループでは、軟弱な少年を対象としていた。

俗悪な男子生徒の集うグループでは、苦手な少年を対象としていた。

活発な女子生徒の集うグループでは、可憐な少女を対象としていた。

淫猥な男子生徒の集うグループでは、清純な少女を対象としていた。

奇怪な女子生徒の集うグループでは、小柄な少年を対象としていた。

そうしてこの日、とある場所で彼らは交錯してゆく。

プロローグ 教室内の惨状報告

玩具の拳銃、つまりエアガンが放たれた。

ちんけであるにも関わらずいやに耳をつんざくようなその音は、教室に静寂を齎す。

「お前ら、今から『だるまさんが転んだ』をやるから、俺が振り向いたら動くんじゃねえぞ」

小学生が発しそうな台詞ではあるが、その声は本来の物とはかけ離れたドスの利いたものであり、さらにその手には玩具でありながらも攻撃力のある拳銃が握られている。

エアガンを手に行っているのは、この中学校の学生服をかなり着崩して身に纏った長身の男子生徒だ。茶髪に染め上げた髪をハリネズミのように逆立て己の存在を強く誇示している。

「おお、楽しそうだ――」

一人、普段からチャラけた態度を見せる少年がその言葉に賛同したのだが、残念ながらゲームは既にスタートしていた。声を発したその少年へと向けて、拳銃を構える男は容赦なく弾を撃ち放つ。

再びの迷惑音にその少年は言葉を塞がれ、眉間に命中した弾によって額から血を流した。

「言っておくけど、動いたのが見つかったらこの拳銃で撃つからね。ちなみに火薬加工済みの弾を使用していまーす」

その声と共に、さらにもう一発銃が火を噴いた。

「――ッ！」

息を飲む声が聞こえたかと思うと、ドサリという音と共に別の少年が床に倒れ伏せた。頬の辺りから血を流している。

倒れた二人の少年は意識を持っていないながらも、動いたら撃たれるということを理解し、最善を尽くす為に微動だにしていない。しかしそれが理由でありながらも、周囲にいたクラスメイトはその不動が銃の威力によるものだと思い込み、不安を募らせていった。

そして、他の人間が行動を起こさないということを確認した男が目を瞑り言う。

「だるまさんがころんだ」

淀みなく言い放たれた言葉に、クラス内の人間は焦りを見せながらも行動をする。多くの人間は近くにあった椅子に座り、起立状態で止まることから逃れる。また、近くに座る椅子の無かった人間は仕方なく地面へと座りこむ。

つまり、誰もだるまさんに近付くことがなかった、ということである。

「あれえ、これじゃあつまらないじゃん」

その光景を見て、男は言い放つ。

「じゃあさ、ルールを変更するよ。今から三回以内に俺にタッチできなかったら、全員死亡」

その台詞に、教室内には異様な空気が流れる。誰かが行けという他人任せの感情の渦だ。

「じゃ、がんばってね。だるまさんがころんだ」

再び目を瞑り、定型句を並べる。子供が遊ぶ時の言葉よりも滑らかなそれは、クラス内に殆ど行動の余地を与えない。

「あらら、みんな全然動いてないじゃん。これは全員死亡になるのかな？」

その未来を心の底から望むように口端を歪ませ、嗤う。

「はい、残り二回ね。だるまさんがころん——だッ！」

今回は一瞬言葉を詰まらせ、参加者へと猶予を与えたのかと周囲の人間には考えられたが、次に放たれる銃声によってその邪推は撃ち滅ぼされる。

ドサリ、という音と、ガラッ、という音と共に一人の少年が床に倒れた。どうやらその少年は床へと倒れ伏す拍子に机に衝突したらしい。

鬼役の男が、その少年の手から何かを取り上げ、皆へ宣告する。

「この男は、刃物を持っていました。どうやら俺に襲いかかろうと

したみたいだね。残念ながら俺に傷を付ける前に俺に殺られたみたいだけど、みんなも同じような真似はしないでね？」

男は手に持った刃渡り十センチほどの調理用ナイフを手元で弄びながら、のんびりとした調子で言葉を並べる。

「まあ、分かっているとは思うけど、その場合即死だから」

そして、男は刃物で襲いかかろうとした少年の頭部に思い切り蹴りを入れた。

声にならない声を上げ、その少年は意識を失う。

「それじゃあ、後一回——って、もうこれが最後じゃん。おいおい、面白くないなあ」

本当に面白くなさそうに男は言い、ゲームを再開する。

「それじゃ、始めよう、最後のゲーム。だるまさ——」

「おい、だるま」

「あん？」

途中まで言いかけたところで、一つの声が入る。その声が怯えの無い真っ直ぐな声だったことで、男はすぐに弾を撃つことなく銃口を向けるのみとなった。

「そろそろこのゲーム飽きてきたからさ、やめにしないか？」

凜と響くその声を発したのは、意外にも女子生徒だった。腕を組み、教室の中ほどで仁王立ちする長髪の彼女は、暴力的な男の視線に対し高圧的に視線を返す。

その光景を見て、クラス内の人間は、流石に女の子に手を出したりはしないだろうという思考の元に小さな安堵感を得る。

「いやあ、女の子に懇願されたら確かに一瞬くらい逡巡するけど——」

しかし、その男は女子生徒の姿を見ても銃を下ろすことなく、あまつさえそのまま放った。

「俺は正直男女差とか興味無いしね」

そしてちんけな銃声と共に、

何か固い物に弾が当たったような音が響いた。

見れば、その空間には机が浮いている。机の上面を男の方に向けて、その女子生徒が机を盾に身を庇ったのだった。

「はは、なかなか面白い真似をするね」

男は言い、その机もとい少女へと近付く。

「そろそろやめにしないかと、言っているんだ！」

まるで男が近付くこと自体を拒否するように少女は言い放ち、手に持つ机を男へと向かって横に薙ぎ払った。しかし男はそれを回避し、再び銃口を向ける。

「あまり反発はしない方がよいよ」

その行動に負けを覚悟して一瞬固まる少女だったが、男は想定外の行動をする。

「……まあいいや、君の勇士に乾杯でもして、今回はこのゲームを終わらせようじゃないか」

言って、男は銃を教室の窓の方へと放り投げた。誰かが開けたのだろう窓からエアガンは飛んで行くが、落着の音が聞こえないことからこの教室が比較的高い階にあることが分かる。

「……」

少女は眼前の男を睨んだまま、男はふざけた表情を保ったまま、休み時間は終了を迎えた。

十数年前、不良の巣窟なる学校が都会には多数存在していた。それは一種の社会現象でありある意味の流行でもあったのだが、そのようなブームはとうの昔に過ぎ去っている。

そして現在、地方の田舎町ではその流行の波がひと遅れして到着し――

彼らが通う中学校では、不良行為が多発するのであった。

今の休み時間のクラス内の状況を脳内で整理して、少年は次の授業の準備をする。

——あの茶髪の男の名前は爽羅^{そうら}、長髪の女の名前は華香^{はなか}だったかな。

この物語の主人公は、なにもしない。

第一章 男子生徒内でのいじめ (1)

二時間目の休み時間、前回の休み時間に面倒事を起こした男が席を立ち上がる。

「おい、康英^{やすひで}」

そして、一人の男子生徒の名前が呼ばれた。

「おっ、呼ばれたぞ康英！」

「はひゃひゃ、今回は何が待っているのかなあ？」

「気持悪いぞ康英ー」

すると、周囲からは口々に声上がる。そのほとんどは彼を罵倒するような声で、当の本人は席に座り俯いたままでいる。

騒ぎ立てる側の一人が、彼の席の目の前に立った。

「おいおい、康英。爽羅さんがお呼びだぜ」

そしてその肩を掴む。

「いたいた痛いあッ！」

掴まれた肩は、激痛を彼の脳内に伝えた。掴む握力はいかほどのものか、見ている側からは推測が出来ないものの、それが暴力的な程度であることは容易に分かる。

その激痛に耐えられず、彼は席を立った。

身長は目の前の少年よりも幾分低く、顔の造りもいわゆる不細工と表現して反論ができないようなものだ。体格も多少太めであり、いかにも、そのような対象にされやすそうだ。

彼は自分の席を立ち、半ば連行状態で先程の爽羅と呼ばれた少年の元へと向かう。

「おお、おお、よく来てくれた康英」

男は手を大きく広げ、目の前の対象を歓迎する。

歓迎して、迎撃するのが彼の流儀なのかもしれない。

「うだッ！」

奇妙な声を上げた少年は、苦しい顔をして左肩を抑える。どうや

ら男の放った右ストレートが彼の左肩に直撃したらしい。なんとも理不尽な暴力を前に、彼は成すすべも無く苦渋の表情で立ち尽くす。「さあて、今日はいくら給料をくれるのかな？」

そんな彼を前に、男は威圧的な顔を近付ける。その圧力に負けそうになる少年は、顔を強張らせながらふるふると首を振る。

「はあ？ 否定？ ちょっと訳わかんないね。なに、給料をくれるかについての質問の答えがはいえってことは、一銭もくれないって事？ そうなの？」

少年はその問いに縦に首を振るべきだと分かっていた。分かっていたのだが、その首を縦に振ることなど到底可能で無い。何を出来るということも無く、少年は黙りこむ。

「黙る、黙るのか。なんだよ一番面白くないパターンだね」

そして男は、少年の脇腹に左手の親指を突き立てた。

「いぎッ！」

またしても奇妙な声を上げ、痛みに悶える。

「面白くないね、面白くないね、面白くないね、面白くないねえ！」

面白くないという単語と共にその親指を叩きつける。地味でありながらも激痛を齎すその攻撃に少年は苦しみ、周囲にいる人間はその光景を見て悦んでいた。

「おいおい、俺達はおもしれえよ、爽羅」

「はひゃひゃ、なにこれ愉快だなあ！」

「気持ち悪い、気持ち悪いコレ！」

さも愉快そうに声を上げ、声を上げ、嗤う。

屈辱を康英と呼ばれた少年は感じるが、このような光景に陥るのは毎日のことだ。既に諦め切った眼で自分の置かれた状況を見つめる。

「で、さ。お小遣いくれるんでしょ？ 俺に」

左手の親指による攻撃を中止し、今度は右手を彼の顎の下へと添えた。

ギリギリとその力を強めてゆき、語気も併せて強めてゆく。

「くれるんだろう？　いくらかなあ、五千円？　一万円、二万円、十万円？」

中学生の彼にとっては途方も無い額を挙げられ、対抗の余地が彼にはない。もう、いつものようにこの人たちが飽きてくれればそれでいい。彼は痛みを感じながら、思う。

彼等の一番の目的は金ではないということをこのやられ役の少年は理解していた。ただ誰かを痛めつけられればそれでよい。周囲の人間よりも目立ち、勝ち誇っていると思えば彼等はそれでよい。そのことを理解して少年は、痛みに耐える。

授業開始のチャイムという名の福音を待ち望み、激痛を堪える。今までの暴力によってできた体の傷は数えきれないものだ。中には、生涯消えることも無いだろうという物も含まれている。だが、そんな傷を残しても、金を渡すわけにはいかない。その後の悪循環を想定して、彼はそう思っているようだった。

そして、言葉を連ねながら異なる手法による痛めつけを始めた男だった。

「ちよつと、ちよーつと待った」

という呑気な声と共に、その男の右腕から血が噴き出した。

「はあ？」

己の身体から血が吹き出ているにも関わらず痛みを感じているような表情をしない男は、声のした方向を睨みつける。

「お、本当に待ってくれたね」

睨みつけられた人物は、なおも呑気に言葉を連ねており、そしてその右手には先程の休み時間に使用されていたエアガンが握られている。彼は掃除用具の上に座っており、かなり高い位置から眺めている。爽やかな笑みと共に冷え切った瞳を顔の表面に張り付け、それでいてその眼鼻立ちは十分に整っている。眼下の男に対して髪の色は幾分黒っぽく、身なりからも爽やかさが滲み出ていた。

「あれ、それさっき俺が使ってたやつじゃねえか」

その事に気が付き、男は確認を取る。

「ああ、そうだ。自分はさっきベランダにいたからな、ありがたく頂戴させていただいたよ」

エアガン所持の理由を何の迷いも無く彼は告げ、引き金に手を添えて目を細めた。

一瞬にして蚊帳の外となった康英は、今ここから逃げようかとも考えたのだが、その後の仕打ちを考えると動く気にもなれず、立ち止まっていた。そもそも周囲には男と同類の男子生徒が数人控えており、逃げられそうにも無いのだが。

「でさ。今君、その少年から金銭を要求していたよね？」

首を軽くかしげつつ、少年は問う。対する男は何を今更、というように堂々と返答する。

「ああ、そうだよ。こいつ見ててムカつくからさ、それくらいの謝罪金は欲しくてね」

なんとも不合理なことを口に出し、掃除用具上の男を睨む。

対する掃除用具上の男は、とある信念を元に、引き金に力を入れていった。

「自分はさ、子供同士の喧嘩とかいじめなんて好きにやって構わないと思うんだよ。でもね、そこに親が絡んでしまったら、想像するだけでも悲しくって、悲しくって。君がその少年から金を要求するということは、彼の親から金を剥奪していると同義だろう。自分はそれが許せなくてね。それで、今までいくらくらい手に入れたかな、君は？」

言い終わると同時に、エアガンの弾が放たれた。今度は何に当たることも無く、その弾は床に凹みを作りながら途方も無いところへと跳ねてゆく。

「はは、君の期待に添えなくて結構。俺は今のところ、一銭も手に入っていない」

その脅しに気後れすることもなく男は手をひらひらと振りながら言った。

「本当か？ 今日では無く、今までだぞ？」

「ああ、まったく面倒だな、本当だよ。な？」

そう言って男は、隣に立ちすくむ少年の肩を無遠慮に叩いた。規定外の威力の打撃にもがきつつも、少年はなんとか首を縦に振った。もし横に振ってでたらめな金額を述べたとしたら、自分の命が本当に危ういと思つての行動だ。

すると高いところから眺める男は、その一言で興味をなくしたとばかりに言葉を紡いだ。

「なーんだ、じゃあどうでもいいやっ」と

そして掃除用具の上から身軽に飛び降りる。スタンという軽快な音と共に着地し、彼はさらに言葉を続けた。救われるのかと期待した少年にとっては絶望の言葉を。

「邪魔してごめんね、続けて」

こうして彼等のいじめ行為は続く。

？

男子生徒がある人物をいじめの対象とするかを決める時、何を基準にするのか。

まず一つ目として、男子生徒の場合は人物の風格の良し悪しで決めるのだろう。

格好良い男はいじめられない、これが自然の摂理ではなかろうか。主人公は思う。

その中でも二パターンあり、第一が、単純に風采が劣っていて弱そう人間だ。

第一章 男子生徒内でのいじめ (2)

掃除用具の上にいた少年が、別の男子グループの元へと歩んで行った。彼は、本来は此方側の人間のように、肩手を軽く上げながら声をかける。

「よっ」

「おう、まっかわ松川」

「やっほい松川」

口々に名字で声をかけられ、彼がこのグループの中では中心的存在であることをうかがわせる。彼は輪の一部となって会話に加わる。

「さーて、何の話をしているのかなあ？」

気だるい声でそう呟くと、

「おう、今日はいっつをどうしてやろうかって話をしているんだ」

即座に一人から回答が返ってきた。回答をした男は顎で教室の一角を指し、そこには一人の男がぼつねんと佇んでいた。

「またか。まあいいや、自分もあいつには個人的な恨みがあるし」

そういつて、視線を輪の内側へと向ける。丁度その時、先ほどとは別の男が声を上げた。

「あいつは一応、俺達と仲良くやっているとはい込んでいるか、それか悪い扱いをされる位置でもいいから俺達と一緒にのグループになりたいって思ってるみたいなんだ」

「確かにそんな感じがする。そしてそれがむしろウザい」

その言葉に別の男が相槌を打つ。

「だから、あそこのグループみたいな一方的ないじめじゃなくて、ノリで懲らしめようって俺は思うんだよね。分かるか？ ノリで懲らしめようって」

「ああ、分かる。『俺も』『俺も』『俺も』——『じゃあ俺も』『どうぞどうぞ』みたいな感じで一人の人間に集中砲火を浴びせようって感じだよな？」

「まさしくそれ」

つまるところ自分達はあまり責任を買い被りたくないということか、と松川は脳内解析を行い、何かいい案がないものかと思案した。そこで一人の男が声を上げる。

「じゃあ罰ゲーム感覚でやろうぜ！」

その考えに、

「おお、賛成！」

「お前ナイスだな！」

「ひゃっほいおもしろー」

「はーい、さんせー」

と彼等は口々に賛同と賞賛の声を上げた。

松川もそれはいい考えだと思い、賛成の意を伝える。

「それじゃあ、どんなゲームが良い？」

始めに意見を提唱した少年が、周囲へと意見を求める。

「純粹にじゃんけんか？」

「そんなゲームじゃうまく勝ち負け調節できないだろ」

「じゃあロシアンルーレット？」

「それだつて俺達の中から死人が出ちゃうぜ」

議論が交わされるが、その答えは中々見つからなかった。そもそも自分達はゲームとかあんまりやらないからな、と松川は思い、無い脳内情報源から過去のゲームを絞り出す。

「ああ、みつかんねーな」

「何かねえかなー」

「はあ」

暫くして、この空間には諦めムードが漂い始めた。

「そろそろ休み時間も終わっちゃうし」

「授業とかあっても無いようなもんだろ」

「まあそうだけどな」

三時間目の授業が始まるまであと一分ほど。この学校では存在意義が理解出来ないチャイムがそろそろ鳴るかという時間で、そろそ

ろ解散しなければならない。

そしてそんな微妙な空気が流れる中、その空気を切り裂くような女子生徒の声が上がった。

「王様ゲームなんてどうかなっ！」

「え？」

その声に議論の中心になっていた少年は後ろを振り返るが、どうやら彼女等の会話は別の話らしい。なんとも不思議な偶然を感じつつ、そのゲームをそのまま提案した。

「そうだな、俺達も王様ゲームなんてどうだろう？」

「おお、それはいい考えだ！」

「これで、この中の誰かが王様になった時に、あいつの番号に何かをやらせればいいんだ」

「女もたまには役に立つんだな」

「よし、じゃあ次の英語の時間道具を作ってやる！」

そうしてこの集団は解散の雰囲気を漂わせたのだが、「おいまてよー、そのゲームは確かにいい考えだけど、結局あいつに何をやらせるつもりなんだよー」

という松川の台詞に、集団の空気が固まる。

「あ」

「忘れてた」

「どうしょ」

「適当でいいんじゃないか？」

そして、無情にも授業開始のチャイムが鳴り響いた。

教室内の少数が席に着き、ほとんどが席に着かずに話を続ける中。彼等は結局、

「まあまだ話してようぜ」

そういう結果へと落ち着く。そもそも授業はあってもないような存在だと解釈する彼等にとってはこのような結論はむしろ通常通りである。

「それじゃあ、誰か女の子を襲わせるってのはどうだ？」

一人の男子生徒が顔を寄せて小声で言った。

「お、それはいいんじゃないか？　なんというか一水二肥ってやつ？」

「たぶん一石二鳥の事だと思うが、農家の息子は黙ってる」

「俺は賛成だ、ついでにカメラでも仕掛けておこうぜ」

「誰もカメラなんて持ってないと思うがな」

口々に言い、彼等は勝手に興奮してゆく。そんな中、松川は、

——女を襲うのは趣味じゃないな、寸前で抜けるとするか。

特定の点においては良心を見せるのだった。

？

第二の条件として、勝ち組グループに入ろうとする人間の内、最も風格の劣っている人間。

主人公は他人事であるが故に、思う。

中途半端に不細工な人間よりも対象になりやすい。

鯛の尾より鯛の頭ということわざが頭に浮かぶ。

第一章 男子生徒内でのいじめ (3)

チャイムが鳴ったにも関わらず、彼等の暴力は続いていた。

「おいおい、授業は始まつてるぞ、席に座れつての！」

そう言つて、爽羅は康英の鳩尾を殴る。殴られた彼は地面に倒れ込み、腹を押さえながらそのままの体勢でいた。

そしてそこに、別の人間が加わる。

先程まで周囲で喚いていた爽羅側の人間だ。ただ見ていただけということに我慢が出来なくなったのか、鼻息を荒くしている。

横になる康英の髪の毛を乱暴に掴み上げ、顔を無理矢理上げさせる。

「おいてめえ、爽羅はまだ満足してねえつてよ、ほら、立ち上げられよ」

顔を寄せてそう言い、狂ったような笑みを見せつけながらその手を途端に放した。彼の頭がそのまま床へと爽快な打撃音を響かせながら落ちる。既に彼の意識は飛んでいるのか、何も声を発せずにいる。

「ちっ、つまんねえの。授業始まるし、このまま放っておこうぜ」

「そうだな。先生は何て言うだろうね」

床へと倒した少年をそのままに、彼等は口々にその場を去ってゆく。そして、その光景を見た他の生徒達は何も言わない。まるでこれが通常の光景であるかのように。

爽羅が呟きながらその場を去ってゆく。

「あー、だりいな。そろそろ中学三年間も終わるわけだし、康英のこと動けなくなるまで殴っても平気だよな？」

独り言として呟いた言葉だったのだが、意外にも返事が返ってきた。

「爽羅君、そろそろ勘弁してあげたら？」

「あん？」

まるで大人が子供を宥めるかのような言い方に、言葉に怒りを混ぜながら彼は返す。その返事を行ったのは女の子だったが、先刻彼に立ち向かった少女とは異なる。眼鏡をかけており、この学校には珍しく制服を綺麗に着こなす姿からは、優等生という三文字が浮かび上がる。

「さすがにあの子、可哀相だよ。別に彼、何もしていないんでしょう？」

そんな少女を目の前にして、彼は怒りを露わにしつつ言葉を返す。「うるせーな。いいだろ俺が何しようが。俺はただあいつを殴りたい。むしろ俺に暴力衝動を与えるあいつをお前はどうかすべきだろう」

しかし、その露出された怒りは、今までの物とは別格の物と客観的には感じられる。

「駄目だよそれは。昔から爽羅を見てきた私としては、一番に君がそうやって暴力的になってしまったことが悔やまれるんだから」

右手の人差し指をぴんと立て、少女は言う。

そんな仕草や言葉に彼は、

「うるせーな、俺の勝手だろ」

そうやって顔を逸らすしかなかったのだった。

？

あの女の子は確か、雨沢さんあめざわといったか。

このクラスの中で一番勉強ができる女の子だった気がする。

大体において僕は他人の成績に興味など無いからよくわからないけれど。

そういう噂が流れているのだから、そうなのだろう。

そして彼女は、このクラスの中で一番の暴れ馬である爽羅と幼馴染らしい。

家がすぐ近くというのが彼等の接点らしいのだが、このクラスと

いう空間での勝ち組は、女の子に恵まれるという位置取りでも人生勝ち組みなのだろうか。

律儀に国語の教科書とノートを机の上に出した主人公が、思う。

第一章 男子生徒内でのいじめ (4)

一切授業にならない国語の授業が終了した。

実際にはチャイムの鳴る前から行動を見せていた一つのグループが、チャイムが鳴ると同時に本格的な行動を開始した。

「おい直幸、ゲームしようぜ、ゲーム！」
なおゆき

教室にその声が響き、直幸と呼ばれた男が振り返った。

「なんだなんだ、面白そうだな」

振り返ってすぐ、彼はその集合体の元へと歩いてゆく。その集合体内部で交わされた目配せなどに気が付くことも無く。

「よし、乗り気だな」

「取り敢えず今から何やるか教えるぜ」

「ルールは簡単、王様ゲームだ」

「ルールじゃねえじゃん」

直幸を呼び込んだ人間が、がやがと言葉を連ねてゆく。それで理解したようで、彼は「いいよ、俺もやる」と言って参加の意を表した。

「それじゃ、くじはもう作ってあるから、はい」

「おい、流石準備が早いね！」

「ひゅーひゅー」

「それじゃ早速、俺から引かせてもらうぜ！」

その集団が騒ぎ立て、ある男がそのくじを引く。

「よし俺も」

「俺もッ！」

「へーい」

それに便乗して、直幸を含めた周囲の人間達もカードを引いてゆく。このゲームの概要を説明すると、数字の書かれたくじの中に一つだけ王様の権限が象られたものがあり、そのくじを引いた人間は数字のくじを引いた人間に指令をする権利が与えられる、といった

ところか。

「おっしゃ、俺が王様だッ！」

「くっそー、こえーなオイ！」

一人の人間が、そのくじを掲げて主張する。そして、ニヤリと笑みを見せたかと思うと、王様権限の指令を出した。

「よーし、じゃあまずはお手柔らかに、四番が二番に往復ビンタ」

「くそッ！ 俺二番じゃねえか、なんて地味に痛い選択を！」

「ざまあみやがれ！」

「ひえーい！」

彼等のそのような騒ぎが数回繰り返される。

そして休み時間が始まって三分ほど経ったところで、彼等の本題が始まった。

互いに軽い目配せをして、作戦を施行する。

「よーし、また行くぜ！」

「おっけい、引くぞー」

「王様来いッ！ あー」

「っしやあキタッ！ いや来てない！」

今度は直幸を覗いた男達がくじを引いてゆく。少々取り残された様な気分を感じた彼は、最後に残ったくじを引く。

「さーて、それじゃあ」

「どんなのが来るんですか！」

「楽しみだ！」

「いえーい！」

そして、王様のくじを引いた人間が、高らかに宣言した。

「一番の人間は、今から女子トイレに潜入してきなさい！」

一瞬空気が冷え固まり、そして、

「お、俺、一番だ」

直幸がおずおずと手を上げたのだった。

？

くじの配置をあらかじめ決めておいたのか。

主人公は光景を見て思う。

此方側のいじめ行為は比較的軽い。

しかしそれゆえに、受ける側の心のダメージは大きいのだろう。

なぜなら、その人間はまだ希望が見えるから。

例えばあちら側の、希望を失くして全てを諦めた身体のダメージが大きい人間は、すべてを捨てているのだから、心は痛まないのかもしれない。

第一章 男子生徒内でのいじめ (5)

もう片方のグループは、授業終了後早々に、男子トイレに来ていた。

「さあて、これで周囲の視線を気にせずボコれるぜ」
爽羅が強い笑みを含めて言う。

「周囲の視線って、さっきの女の子の視線のことか？」
そこへ、一人の少年が茶化しを入れる。その言葉に焦ったように彼は答える。

「ばっ、ちげえよ！ んなわけあるか！」

そのグループの皆が、凶星だったんだなと脳内解析を行いつつ、この空間内に呼び出された人間の顔を見た。

「……」

既に無言を貫き始め、顔もう無表情としか表現できない。自分に責任があるわけでもないのにに関わらず教師に叱られたこともあって、既に世界を冷めた目で見ているようにも見える。

「さーて、そんなお前を俺の怒りで破壊してやる」

爽羅は、拳を硬く硬く握りながら言い放つ。その言葉に対しても康英は言葉を返すことをせずに、ただただ無表情で佇む。

「……つまんねえ人間だな、まあいい」

そういつて彼は、目の前の人間を男子トイレの個室へと押し込む。計五人の男が入った為、この空間は蒸し暑い窮屈な空間となった。それでも、この学校はトイレの個室が案外広く、五人の男子生徒が入っても身動きは十分に取れるのだった。

「さーて……ッ！」

小さく息を吐き、爽羅は彼の鳩尾へと拳を入れる。その衝撃に殴られた個所を抑えて彼は倒れ込もうとするのだが、そこへ男の右手が侵入する。

「倒れるんじゃないよ、お前、汚れるよ？」

確実に親切に由来するものではない言葉が発せられ、その右手は彼の喉元を捉えた。

「っ……」

小さく息を漏らし、彼は固まる。

「俺はお前を傷めつけたくてこういうことをしてるんじゃないんだ。俺は俺の怒りの矛先を何でもいいから見つけて怒りをぶつける。それを望んでいるんだ。だから、お前に水をかけたり何かを無理矢理食べさせたりみたいなマネはしない。俺はただお前を殴ればいいんだ」

そう言って、再び殴る。

周囲の人間も次第に手を出すようになり、四人がかりでの暴行へと変化した。その状態が数分間続く。ただ殴り、ただ殴られるだけの空間は、周囲に打撲音を響かせる。

時折混じる骨が折れたかのような音は、同時に周囲へと緊張感を与えてゆく。

一人の男の蹴りが、彼の金的に直撃した。悶える様な表情を見せ、その場に再び倒れ込もうとする。しかし、そこで爽羅が彼の鳩尾に右ストレートを叩き込みつつその圧力のまま壁に押し付けた為、とどまってしまう。

もう、自分なんてどうでもいい。

別に殴りたきゃ殴ればいいだろう。

既に何も感じない程に狂った康英は、彼等のサンドバッグへと変貌する。

今度は腹に膝蹴りを入れられた。食べた物が出そうになった。

次に頬から耳にかけてビンタを入れられた。音が何も聞こえなくなった。

そして目元を殴られた。とうの数分前から目は見えない。

彼等の暴力は続く。

ただただ己の暴力的欲望を満足させるためだけに。

？

彼等の暴力は一方的だ。

相手の心情や自分の心情など意に介さない。

ただただものを殴ることに快感を得るタイプの人間だ。

だったら、人間じゃなくてサンドバッグを殴ればいい。

普通であればそう思うであろう。

しかし、彼等はなぜか人間を選ぶ。

それは自分にも理解が出来ない点だ。

主人公は、その光景を見て悩んだ。

第一章 男子生徒内でのいじめ (6)

そうして彼等は女子トイレの入り口傍に移動した。

目の前には、神聖なる場所とでも言うべき空間が存在している。

その空間を前にして直幸は、

「ああ、緊張するなあ」

と、満更でもない顔をしているのだった。

そんな彼を視界の片隅に入れつつ、彼等は今後の作戦を考える。

彼がトイレの中に侵入したら、自分達はそそくさとその場から立ち去るという単純な作戦だ。

「楽しみだ楽しみだ」

一人の少年が呟く。

その呟きに押されるかのように、直幸は女子トイレのドアノブに手をかけた。

「よし、行くか」

そう呟き、周囲の人間が笑いを堪えているということに気が付くことも無く、ゆっくりゆっくりとその手に力を込めてゆく。そしてドアノブに重りをかけた瞬間――

「うおおあああああっああっあああああああああああああああ
っあああっああ！」

大音量の叫び声が聞こえた。

「は？ なんだ？」

「おい、今の何？」

「ちょっとこわいんだけど」

面々が口々に言葉を発していく中、直幸は声のした方向へと目を向ける。その節に、ドアノブは完全に周り、あとは押すだけという状態になる。

「おあああああつ ああああ つあああ つあああ つあああ つあああ つあああ つあああ
つあああ つ！」

その叫び声が未だに続く中、まるで叫んでいる張本人が出て来るかのように、隣の男子トイレのドアが開く。

「おい、誰か来るぞ」

一人が焦ったように言えばそこからは、

下半身を血で染めた男がよろめきながら走り出てきた。

「うわあああああああつつあああああああかかかああかかああつああつかああつ！」

叫び声を上げながら走り、その集団へと近付いてゆく。

そして辿り着くと、直幸はその人間に物理的に背中を押され、女子トイレの中へと突入してしまった。その姿を見届けた人間は、作戦がうまく行った事に喜ぶ者と突然の事に驚きを隠せない者に分かれる。

そんな彼等を見捨てるように、血に染まる男は走り去って行った。

「よし、うん、作戦成功だ、教室へと逃げよう！」

そして彼等も、無情にもその場を去って行つた。

?

ああ、さっきの連中か。

主人公は、視線を再び男子トイレ内へと向けて確認をした。

「どうやら妙な事を仕出かしたみたいだな。」

彼は机に座りながら思考する。

第一章 男子生徒内でのいじめ (7)

男子トイレ内では爽羅達による暴力が未だに続く。

誰も言葉を交わすことがなく、ただただ目の前の人間に暴力を振るう。

少年からは視覚、聴覚、皮膚感覚、感情的感覚等が消え去っている。そのため、殴られる側も何も言わず何もせず何も感じず、ただただ殴られるのみ。

その状態が始まってから幾ほど経っただろうか。

「なんか、つまんねえな」

突然爽羅が呟いた。

「何だ？ 十分楽しいじゃねえか」

その言葉に一人の連れ添いが反論をするも、爽羅はさらにそれを否定して意見を述べる。

「いや、ただ一方的に殴るのは案外つまらないって気が付いたんだ。なんというか、相手も反抗したり苦しんだりしないと、あまり面白くないみたいだ。カレーライスの福神漬けといったところか」

「ああ、まあそれはなんとなく分かるか」

連れ添いが同調し、一瞬暴力の雨が止む。そして、その空白に何かを見出したのか、被害を受ける少年は、うつすらと目を開ける。しかし、その後に発せられた言葉は、やはりその少年の希望を断ち切るものであり、断ち切られた希望は地獄へと舞い降りる。

「とりあえず、こいつを殺せばいいのかな？」

しかしその言葉に、控えていたもう一人の男が宥めにかかる。

「いやいや、殺しちゃあまずいだろ、さすがに」

「そうか？ まあそうだな」

爽羅は頷き、眼前の少年を再び見遣る。整わない眼鼻立ちが、殴られに殴られた為、一層の歪みを形成している。口と鼻からは血を垂れ流し、目元や頬等は紫色に変色している。

自分で作りだしたその人間の顔とも怪しい物体を見て、男は、
「汚え顔だなあオイ！ 見ていて不快なんだよォ！」

と、暴言を吐きながら害を加えるのだった。

純粹な蹴り上げによって、少年の股間に衝撃を与える。男の急所であるそこを蹴られ、次第に腹部へと痛みが襲ってくる。

腹を押さえ、苦痛にゆがむその様は、いつの間にか崩れていた無表情よりも無残で卑劣なものだった。

「まあいいや、とにかくこれが続け——」

爽羅が新しい遊びを模索することができずに、先ほどと同じような形で拳を握る。しかし、その行いは一つの叫び声によってかき消されたのだった。

？

彼等の暴力はあの叫びがなかったら終わりがなかったのだろうか。
彼は思う。

良かったと言わべきか、どちらにしる面白そうだ。

主人公は机に座りながら男子トイレ内の光景を見遣る。

その机の上には電子辞書が置かれていた。

第二章 女子生徒内でのいじめ (1)

二時間目の休み時間、前回の休み時間に面倒事を解決した少女が声をかけられる。

「はあ？ 仕返し？」

その声に対して返したのは、気だるげな疑問だ。長い前髪の合間に見える鋭い眼が、先ほどよりも幾分和らいでいるように感じられる。

「そそ、あたしこないだ、告白するって吹聴したでしょ？」

「そういえばそんなことしてたね」

「そういえばって……あたしにとっては一大事件だったのに」
あきれたように声をかけた友人が肩を落とす。その様子を気にすることも無く、少女は興味本位の質問を行う。

「で、どうだったの？」

本当に心の底からの興味なのだと分かるからこそ、対する友人は困り果てる。

「だからさ、華香^{はなか}、話聞してる？ 別に好きな女の子がいるからって断られたんだって、さっき言ったでしょ。それで、その仕返しをして欲しいって話なの」

詳しい説明を受けて、華香と呼ばれた少女は、得心がいったように頷いた。

「つまり、その女の子を懲らしめろってこと？」

「そういうこと」

なんとも不条理な理由であるのだが、このようなことは彼女等の間ではよくあることなのか何も疑問を抱かずに華香が言う。

「それは面白そうだね、ちなみに誰？」

その疑問を聞いて、対する少女は教室の角の席を指差した。

「あいつよ。あんな女のどこが良いの？ マジで気持ち悪いんだけど」

その先には、元気に笑顔を向けて友人と会話をしている少女がいた。すらっとした体格で、眼鼻立ちも整っている。『あんな女』と評価されているが、見たところ、かなり男子生徒からの好意は寄せられるだろうと見える。

「ああ、あいつね。分かった」

その人物を確認し、彼女は想像する。あの女をどのようにして懲らしめようか。今教室の一幕でさっきの男が男子生徒に暴力を振っているが、彼女はあれとは異なる。暴力が好きなのではなく、相手が苦しみに悶える苦しみを想像するのが愉快なのだった。

つい、声に出してしまう。

「何をして苦しめようかな、刃物とかはちょっとベタ過ぎるかな？」

「ちよつと華香、マジ怖いんだけど」

友人の黒々しい笑みを見、彼女は身体を軽く震わせる。

「あ、ごめんごめん。でもさ、楽しみじゃない？」

「ま、まあ、それは分かるけど」

その表情から一転、今度は無邪気な笑顔へと豹変する。彼女は、ダークな嗜虐意識を素直な感情として、その未来を楽しみにしているようだった。

「ねえねえ、何の話？」

すると、華香に対して小さな畏怖の感情を携え始めた少女に抱きつくように、一人の少女が会話に加わろうとした。

「教えて教えてー」

さらにもう一人加わり、計四人での会話になる。

「ちよつと、抱きつかないでよ……まあいいや。あのね」

相談を持ちかけた少女が今の会話の内容を述べようとしたのだが、その言葉を遮るように相談を持ちかけられた側の少女が言う。

「簡単に言うと真奈美ちゃんをいじめろって話」

「何それヒドイ、けど楽しそう！」

「はは、楽しそう楽しそう！」

彼女等のノリに小さな溜息を吐き、少女は不安を感じるものの、

自分の怒りを鎮めるために自分が頼んだことなのだから、と思い、成り行きに任せることに決めた。

「じゃあさ、場所は どうする？　こういうのって場所がすごく大事だと思うの！」

少女に抱きついたまま、彼女は嬉々とした表情でそう述べる。

「そうだね、体育館裏つてのがよくあるパターンだけど、お前は満足しないんだろう？」

華香は本当に悩んでいるように言い、抱きつき少女を見る。

「勿論、そんなんじゃない普通すぎてつまらないからね」

「だよー、じゃあどうしようかなあ？　何かいい案はない？」

今度は相談を持ちかけた側の少女を見て、質問をした。そんなこと聞かれても、と少女は思うものの、真っ先に思い浮かんだ場所を口に出す。

「ええと、トイレなんかどう？　普通すぎる？」

言われて華香は考え、

「確かに普通、ものすごく普通。……だがそれがいい！」

と目を輝かせながら言ったのだった。

「えー、私は反対なんだけど。もっというところないの？　例えば屋上とか、職員室とか、階段下の倉庫とか、学校にはそういうスポーツが山のようにあるのに」

華香と同様に嗜虐趣味があるらしい少女は不満を述べるも、華香の「トイレは道具も豊富だしいいと思うんだけど」という言葉に対して暫く思考し、納得がいったように賛成したのだった。

「じゃあじゃあ、やっぱり水浴びの刑？　知ってる？　額の上に水を一滴ずつポタポタと落としていると、一時間もしない内に憤死するんだって！」

「それじゃあ私が見てるだけになるじゃん」

彼女等の物騒な会話は続き、彼女らの仲間とも言えるメンバーがまた二人加わり、五人がかりのグループが形成されたのだった。

？

女のいじめは陰湿だ。

そういう言葉を聞いたことがある。

しかしそれは、ただ一般の女子生徒には行動力がないというだけなのではないかと思う。

男子生徒と異なり、しっかりと後先を考えているためかもしれないが、大っぴらな行動には移さないのではないだろうか。

そして問題なのは、この学校の彼女等には行動力があるということだ。

主人公は呆れたように思った。

第二章 女子生徒内でのいじめ (2)

「ああ、あ、あの、真奈美さん！」

椅子に座って空を眺めていると、とある少年が声をかけてきた。

見た目はかなり幼く、それでいて顔の造形は整っており、髪さえ伸ばせば女の子と言っても差し支えないだろう。声をかけられた少女は一瞬その姿に惚れ、言葉を返した。

「ん、なあに？」

可憐な微笑みを湛えれば、少年は照れたように俯き、頬を赤く染めながらもじもじとする。どうしたのだろうと不審に思いつつも、このクラスの活発な男子生徒よりは好ましいと思えて彼女は、笑顔を途絶えさせることなく少年を見る。

「え、ええと、あの、怒らないで……下さい」

下を向いたまま小さく声を出し、暫くして顔を上げた。その表情は不安に彩られており、彼女にはその表情さえ可愛いと思えてしまうのだった。

「どうしたの？ 私は怒らないから、安心して」

まるで子供をあやす様にそう言ってしまう。そしてその言葉によって勇気を見出したのか、少年は、意を決したような表情をする。本当にどうしたのだろう、と彼女が思っていると、その少年は、

「ごめんなさい！」

と叫びながら、少女の胸を鷲掴みにした。

「え、え？」

困惑した声を上げ、彼女は何もできずに目を丸くする。

「いち、にい、さん」

数字を数えながらその声に合わせるように、少年はその手で柔らかい物体の形状を何度も変えることに勤しんだ。

「あ、あの、ふわあ、ちよっと、ん、いやっ」

「はち、きゅう、じゅう！」

少年は律儀に十まで数字を数え、だんだんと強くなる指の力をそこで解放し、

「す、すいませんでした!」

と叫ぶようにして言いながら走り去って行ったのだった。未だに落ち着かない心臓の動悸を落ち着かせようと思いつつも少年の走った方向を見れば、そこには女子生徒の集う空間が形成されていた。まるで歓迎されるように少年は迎え入れられ、一部の少女は胸を揉まれた彼女の方を見遣る。

——な、なんなんだろう。

途端に不安が胸の中を支配する。

自分がやられ役にあげられているのだろうか、それとも今の少年がやられ役にあげられているのだろうか、不審に思うものの、今あの集団に何を言うこともできない。

「真奈美ちゃん、どうしたの?」

すると、今の光景を見ていたと思われる少女が声をかけてきた。

「あ、雨沢さん。よく分からないの。なんだか突然やってきて、こう……」

彼女は自分の胸を揉むような仕草を見せて、雨沢と呼ばれた少女に説明をする。

「前の休み時間といい、今のことといい、なんだか騒がしいよね、このクラス」

少女は溜息を吐きながら、教室内を見渡す。真奈美もそれにつられて教室の中を見渡せば、確かにこの教室は異質な空気を蓄えているように感じられる。

「雨沢さんなんかは、こんなクラスじゃあ勉強も出来なくて大変じゃない?」

彼女はそう気遣うように言うが、

「私は平気よ。学校の授業はもう当てにしていけないから。むしろ授業は睡眠時間で、家で夜中まで寝ないで勉強するっていう形式をとっているの」

「うわあ、それは効率的だね」

驚いたように目を見張り彼女は少女の目を見る。その目は疲れたような色をしていたが、それは本当ならば睡眠時間である今現在に目を覚ましているからなのだろう。

「はは、ありがとう。……というか爽羅君、また康英君の事をいじめてるよ」

言われてみてみれば、少女の言うとおり教室の一面では非常に暴力的な光景が見られる。それを見て、彼女は先程の少年を思い出す。されたことに恥ずかしさを感じて頬を朱に染め、本当にこの教室はおかしいのだと再認識する。

「そういえば雨沢さんって、爽羅と仲良いよね？」

「ええ、まあね。昔からの仲だから」

所謂幼馴染というやつか、真奈美はそう思い、あんな男にこんな可愛らしい幼馴染がいるなんて、と勿体なく思うのだった。

「そうなんだ、大変だね」

皮肉の意味も込めて少女に笑いかけると、雨沢は眼鏡をすいっと掛け直し、困ったような表情を浮かべた。

「本当に大変なんだから。チャイムがなったら一旦収まるだろうし、そうしたら爽羅君を宥めてくるね」

そう言って少女は歩きだそうとした。

「え、あいつを宥めるの？ そんな無茶はしないほうがいいんじゃない？ ……」

「大丈夫、爽羅君は私には手を出さないから」

真奈美がそれを止めようとするも、爽やかな笑みを返して雨沢は歩きます。これが幼馴染という関係の織りなす信頼というものなのか、と感嘆しつつ、自分にもそういう存在が欲しかったと彼女は悔やむ。

「本当に、おかしなクラスよね」

呟いたその瞬間、チャイムは鳴った。

？

女子生徒によるいじめ行為において、対象とされる人間はどのような人なのか。

それは、男子生徒とは異なり、どちらかというところ風采の良い人間なのではないだろうか。

それも、男子生徒から見ても、良いと思わせる様な少女。

つまり嫉妬という感情によって決定させるのではないか。

男から見た可愛いと女から見た可愛いは大きく異なる。

その差異が、私達から見たら可愛くならないのになぜ男に好かれるのか、という怒りと嫉妬に影響を与えているのだろう。自分はそう考えている。

主人公は自分の思ったことを頭の中で述べた。

第二章 女子生徒内でのいじめ (3)

「ちよつとごめんねー」

後ろから声をかけられた。男子生徒が中心になって教室中を歩き回り、元来声の小さな国語教師の声は生徒たちのざわめきで聞こえない。そんな国語の授業が終了し、背伸びをしたところだった。

「ん？ どうしたの、華香？」

真奈美は声をかけてきた少女に返す。彼女が今から何をしようと考えているのかも知らず、真奈美はにこやかな笑みを浮かべたままでいる。

しかし次の、

「ちよつとトイレに行かない？」

という一言と、その言葉を発した口元の歪みに、脳が警戒の反応を示したのだった。

「え、ええと、その……行くつもりではあったけど……」

しかし、ここであからさまに拒否したところで、自分の思い過ぎだった場合にどう対応すればいいのか分からなくなる。いや、この表情は確実に危険な物といっても差し支えないだろう。そして、それ故に怖いのだ。

「ほーら、行こうよ」

口調は普段のテンションのままで、それでいて表情はどこまでもおどましく、華香は彼女の腕を無理矢理に掴んだ。

「い、いたいっ」

その強引な動作に痛みを感じつつも、対する友人は言葉を聞かない。そのまま手を引き、真奈美の身体を椅子から起こす。それに周囲に控えていた三人の人間も加担して、四人がかりの強制連行が形成された。

「ほらほら、楽しいことをしてあげるから、ね？」

言い聞かせるようにそう言いながら、強制的に誘導する。そして

そのまま、彼女等の目的の場所に到着してしまったのだった。

「残念でしたー」

そう言って、真奈美をトイレの個室に押し込む。彼女も必死に反抗をしたものの、四人がかりの力には到底敵わなかった。

「でもでも、楽しい事ってのは本当だよ？」

無邪気な色を含ませた声で、華香は言う。真奈美はこの後に続く言葉を予想し、その予想が大正解だったことに絶望した。

「勿論、楽しいのは私だけどね」

その言葉を発しながら、彼女は目の前の標的を蹴り飛ばす。普段から大人しい少女は容易に尻もちをつき、和式便器内部にへたり込むことこそなかったものの、不快な表情をする。

「あはは！ 本当に不愉快そうな顔してんじゃん！」

華香は高く高く笑い、少女の顔に自らの顔を近付けた。

「どうして私達がこんなことをしているか、わかる？」

その問いに、心当たりが何一つない少女は、ふるふると首を振るのみだった。

「まあ分かるわけも無いよねえ」

目を細め、いやらしい笑みを浮かべる。その表情からは勝ち誇った様子と共に、悦楽というものまで含有されていたように少女は感じた。

「じゃあ、今から説明してあげる。……あれ、どうしてだっけ？」

しかし、ゆっくりとしつかりと告げようとしたものの、彼女は大変な所を忘却してしまい、後ろに控える相談主を振り返った。

「はあ……いいわ、あたしから直接説明する」

呆れたように言って、彼女は華香と場所を交代した。手を腰にあてがい、見下す形で少女を見遣る。その鋭い眼光に気圧されつつ、少女は話に耳を傾けた。

「あんたはね、あたしの恋路を邪魔したのよ。醜い、本当に醜い。あたしには好きなヒトがいてね、本当に本当に心の底から愛していたの。だから昨日、あたしは彼にこの思いを告げたのよ。すごくす

ごく緊張したわ。胸が張り裂けるかと思った」

ここまで聞き、真奈美はこの独白の不条理さを予感する。頭から血の気が引くのを感じつつその話を聞けば、その予感は、

「だけどね、断られたのよ。有難いけれど、受け入れることは出来ないって。なぜだかは、分かるわよね？ 彼には好きな人がいたのよ。あたしよりも好きな人間——」

ただただ無情に的中するばかりだった。

「——真奈美とかいう女がいたのよ」

そんな理由で自分がこの状況に陥るだなんて、どうして許せることができるだろうか。少女は口をぱくつかせながら言葉を模索するも、何も言えない。

そして最後に、彼女は呟いた。

「大好きだったのに、松川君」

？

繋がった。

繋がってしまった。

主人公は、女子トイレ内の光景を見て密かに嗤う。

どうしてこうも恋愛沙汰が好きなのか。

どうしてこうも自分しか見ていないのか。

そんな堕ちた人間を見るのが、主人公は愉快だった。

第二章 女子生徒内でのいじめ (4) (前書き)

これはエロじゃない！

物語上必要な内容だったんだ！

とか言ってみるものの、作者の趣味嗜好がないとも言いきれない昨今である。

第二章 女子生徒内でのいじめ (4)

「というわけで、ばっしゃーん！」

相談を持ちかけた彼女の独白が終わると、その後ろに控えていた華香が水をバケツ一杯に抱え、その水をそのまま真奈美にかけた。

見た目以上の質量と衝撃を伴う水の流れは少女を襲い、全身に湿り気を行き渡らせる。

「けほっ、けほっ」

その水が喉か鼻に入り込んだのか、少女はせき込んだ。髪の外側は完全に水が滴り、服に至っては内部までも水が浸食していた。視線による浸透性を高めてしまったシャツが、その内側にある少女の下着を映し出し、水分を含んでしまった制服は重く彼女の体表からずり落ちようとする。尻もちをついた状態であるが故の下着の露出が、さらにその姿態に艶めかしさを付け加えている。

もっとも目の前に居るのは女子生徒であるため、艶めかしさは無意味なのだが。

「あんたって見た目が可愛いからねえ、ホント羨ましいわあ」

真奈美のあられも無い姿を見て、妬ましそうに華香は言う。その顔の表面には笑みが浮かんでいるものの、その笑みはあくまで狂喜の笑みであることは言うまでも無い。

「可愛いあなたを見ているのもっと可愛くしたくなっちゃうなあ」

その目を細めて彼女は言う。恍惚として頬を朱に染めているのは、言葉に出している可愛さによるものではなく、今から行う物事に対する興奮なのだろう。

「知ってる？ 可愛いって、可哀相な所があるから可愛いって言うんだって。可哀相な所がなくて整っている女ってのは、それは可愛いんじゃないくて、綺麗って表現するからね」

そう言って彼女は、自ら少女に近寄った。対する少女はその姿に恐怖を覚え、接近を拒もうとする。

「だからさ——」

しかし彼女はその拒否を完全に無視する。はたまた、個人的な興奮の為に気が付いていないだけなのかもしれない。

「——あんたをもっと可哀相にしてあげる」

彼女は少女の手を取った。その行為に少なからず安心感という物を覚えてしまった少女は、即座に不信感に感情を切り替える。しかして少女の手は強引に引っ張られ、無理矢理に立ち上がらされた。

「可哀相で可哀相で可哀相で、淫らな姿にしてあげる」

その少女を背後から捉え、濡れることに抵抗を感じるでもなく身体を殆ど密着させる。耳元で囁かれ、少女はゾクリという不可思議な感覚と焦りに襲われた。

華香は自分の身体の前に収まるようにしている真奈美の手を握ったまま、自分の膝で少女の裏膝を押しだした。

「ふわぁ！」

突然の事に驚かされて真奈美は声を上げる。そのまま少女は膝を曲げられ、和式の便座に座りこむ形となってしまった。背後には彼女が陣取っており、それでいながら真奈美は自分が何をされるのか見当もつかず、当惑する。

「じゃあ、動画お願いね。私の事は絶対に映すんじゃないよ」

「はいはい」

すると華香の側の人間が確認を取る。

——動画？

その単語に不穏な気配を感じつつ、少女は何もできない。

そして華香が、

「君はこういうの、初めてかな？」

真奈美の密部に下着の上から手を伸ばした。

「え、ええ！？」

その事に、何よりも驚きが感情として現れる。

彼女は伸ばした手で柔らかな恥丘の表面をさすり、抱える少女の反応を待つ。次第に少女は感覚が芽生えてきたらしく、息が乱れる。

「どうやらこの反応は、初めてみたいだね」

彼女は言い、目を細める。下着の上から少女の未発達の入口へと指を押しこみ、具合を確かめようとするも、初めに全身を濡らしてしまったため、期待通りの答えは帰って来ることはなかった。

「あ、だけどね、私はレズとかそういう趣味を持っているわけじゃないよ？」

彼女は言うが、その言葉はすでに少女は聞いていない。

「いや、やだ、やめてッ！」

反抗の声も次第に艶めかしいものへと変貌してゆく。その頃合いを見計らって、華香は少女の下着をずらし、そのまま指を滑り込ませた。

「いやあ、あ、だめえ！」

少女の秘めるべき部分が半分ほど曝け出され、彼女はその部位に指をかける。そのまま内部に埋め込むことはないものの、浅く強く刺激を与えた。本来ならば学校内への持ち込みを禁じられている筈の携帯電話での撮影をされながら、少女は羞恥と屈辱に悶える。

「う、うあ、ああっ！」

今までに感じたことの無い異質な感覚に囚われ、喘ぐ。

ところで休み時間とは何のために設けられているのか、基本的に生徒の集中力を持続させるための休憩時間であるのだが、二次的に用を足す為の猶予とも言える。そして真奈美もまた、元々その用事をすませる筈だったのであろう。

「い、いやあ、見ないでえ、はあんっ！」

華香の指が尿意を刺激し、そのまま放尿をしてしまったのだった。通常の生活では日常的である事柄も、他人に見られることと撮影されることにより極度の羞恥を覚えさせる。

そうして数秒、すべてを出し切り止まったところで、華香が口を開いた。

「よし、良い絵が撮れたんじゃない？ 男なら結構な値段で買ってくれると思うよ」

その言葉に眩暈すらを感じながら、真奈美はぐったりとする。どうしてこんなことになってしまったのだろう、と。

「そんなわけで、ほら水、水。さすがに洗わないではいけないよ」華香はそんな少女を放りだし、水道へと向かう。そして手を軽く洗った後再び先程のバケツを取り出した。

そして便器に溜まった尿を流すことも目的として水をかけようとした刹那――

「うおおああああっああっああああああああああああ
っあああっああ！」

件の叫び声は聞こえてきたのだった。男子トイレと女子トイレの間の壁を挟み、叫び声が聞こえて来る。

「は、なにこれ？」

「ちょっと、ウザ」

周囲にいた面々が口々に言う中、華香は手に持ったバケツを静止させていた。

ざわめきがだんだんと静かになってきて、我に返った彼女はバケツを構える。

そして――女子トイレに男子生徒が侵入してきた。

？

いじめという事柄を既に通り越してはいないだろうか、と主人公は思う。

彼女達のやり取りを見て、何も男として興奮することも無く。ただただ進む物語の中にのみ面白さを感じて。

第二章 女子生徒内でのいじめ (5)

「おっとっと、って……あれえ」

侵入してきた男子生徒の第一声はこれだった。

まるで予期していなかった事柄が起きていたとでもいう様な言い方。だが実際に、この空間では彼の予測を超えた光景が存在していたのだ。

「ちよっと、何入ってきてんの？」

華香は当然の疑問を口にする。

「いやあ、いろいろあります」

男、直幸は、頭をかきながら弁明しようとするが、彼女達はそれすらも許さない。

「いろいろなじゃねえよ！ 何女子トイレに入ってきてんだよ！」

「本格的な変態だろ！」

その剣幕に押され、彼はただただ怯むだけだったのだが、突然華香が彼を呼びとめた。

「なあ、お前」

「な、なんだ？」

彼女は手に持っていたバケツを見せるように掲げ出し、

「涼みたくはないか？」

相手の同意を待つことも無くその水をぶちまけた。

水が彼の身体と床や壁を撃ち、豪快な音を響かせる。直幸は水を飲んでしまったのか噎せかえっている。

「けほっ、けほ、っかはっ」

その男に華香は近付き、さらにそのまま胸倉を掴み上げた。

「せっかくだからさ、私達の遊び相手になつてよ」

彼はその言葉の意味を理解出来ずに何も答えないが、彼女はそもそも答えというものを欲していない。強引に男を引きずった。

彼の向かわされた先は、女子トイレの個室。そしてそこには、先

客である真奈美がいる。

「う、うわあ！」

声を上げて押し込まれた先にその少女が艶めかしい姿でいるのを見て、彼は少なからず興奮を覚えたのだが、その感情も即座に消え失せてしまう。

「さて、二人仲良く水浴びの刑だよ。真奈美に関しては、こんな糞みたいな男と並んでそんな姿態を晒すんだから、ものすごく屈辱的だね、丁度いいじゃん」

彼女は宣言して、後ろに控えていた仲間からバケツ一杯に入った水を受け取った。

「ほーら、ばっしゃーん！」

掛け声と共に、水圧が二人の人間を襲う。

「ほらほら、もう一回、もう一回！」

バケツは三つほどあるらしく、順繰りに絶え間なく水は押し寄せてきた。

いつしか女子トイレの床全体が水に浸されたのだが、彼女はそれを気にしない。ただただ自分の欲望のままに水を掛け続けた。

だがしかし、

「ほーらはやく、はやく水、頂戴」

気が付くとバケツの配給は止まっており、華香は後ろのメンバーに声を掛けた。しかし、返ってきたのは予想外の答え。

「いや、それがさ、水出てこないんだよね」

「捻っても出ないのー」

「別の水道も、出ねえよ」

水道水が出てこなくなってしまったのだ。

彼女は心当たりを脳内検索するが、見当たらない。

そして、懸案事項はもう一つやって来る。

唐突に、

「ぼ、僕にも水を掛けてくださいっ！ ひいっ！」

その声は、もう片方の閉ざされた個室から聞こえてきた。

「はあ？」

華香は率直に疑問の言葉を返すが、真奈美は、その声が先程の休み時間に突然やってきた少年だったということに気が付く。

そして二つの事柄に頭を悩ませる華香達に止めを刺す様に、三つ目の迷惑事が降りかかってきた。これも、唐突に。

女子トイレの窓が、蹴破られたのだった。

？

笑う主人公は、どこまでも愉快そうに笑う。
全てが変わったこの瞬間を愛するかのように。
人以上に、物語を、主人公は愛していた。

第三章 男子生徒による性的ないじめ (1)

二時間目の休み時間、前回の休み時間に一番初めに被弾した少年が提案する。

「よし、俺はもう我慢の限界だ」

なんの宣言なのかというツツコミを、唐突に話を切り出された面々は心の中で思うものの、誰も口にしない。結局皆何を指しているのかを理解していて、彼ら自身も同じ心境だからなのだ。

「俺の年齢を考えてみる、四捨五入すれば二十歳だろ？」

だからどうしたというツツコミを、唐突に話題を転換された面々は心の中でやはり思うものの、誰も口にしない。結局皆何を指しているのかを理解していて、彼ら自身も同じ心境だからなのだ。

「無論、お前らも協力するよな？」

とりあえずその協力する内容を述べようとは思わないのかというツツコミを、唐突に請願された面々は心の中で相変わらず思うものの、誰も口にしない。結局皆何を協力すればいいのかを理解していて、彼ら自身も同じ心境だからなのだ。

そうして、三度の言葉を経て、この集団は一致団結した。

「よし、俺達は中学生という規制されるべき存在の枠を逸脱して、今から汚れ切った大人の世界に存在する汚れきった行いを施行する、文句はないな」

高らかに宣言し、面々を見渡す。

その少年はクルクルと跳ねる髪を汗で湿らせ、鼻息を荒くしていた。その少年の周囲に集まる人間は、ガタイの良い運動部と思しき人間やら、ひよろつと痩せ細った背高眼鏡やら、顔中をニキビで埋めた夜更かし男児やら、種々様々だ。

「よし、まずは対象を決めよう」

その少年の言葉に、一人の別の男が声を上げた、運動部男児だ。

「新井田、俺はスカートを短くして艶めかしい生足を露出させてい

る、エロくてエロい女の子を対象として挙げたい!」

しかしその発言に、ブーイングが飛び交った。

「黙れよビッチ厨が、所詮お前はネットの垂れ流しビッチエロ動画しか見た事ねえんだろ!」

「一日に四回は見える物を見て何が嬉しいんだ、この進歩しないベシチ常連バツターめ」

「どうせ男がいる、その男に見つかってみろ、死ぬぜ」

すると今度は、背高眼鏡が声を上げた。

「新井田、俺は身長百四十二センチのあの子を推薦する!」

その発言に飛び交ったのは賛成の意見だったが。

「おお、ロリータ最高だぜ! 俺は大賛成だ!」

「あの子の焦りに焦った表情を見れるのか、うひょおおお!」

「待て、待て! 俺はあの子が純粋に好きだ、だから却下したい!」

一名のみ拒否をする者がいた。その人物を見て、リーダーらしき

新井田と呼ばれた少年は、個人の意思を尊重したようだ。

「あの子はやめにしておこう。俺自身も個人的にナデナデしたいし、そのためにはあの陽気さと健気さと純粋な心を大事に取っておかなければならない」

周囲の男たちはなぜか容易く納得し、次の人物を模索しはじめた。そして三人目を挙げたのはニキビ男だった。

「あえて長身細身のあの方を狙うのはどうかね!」

案の定批判の声上がる。

「身長高かったら俺達負けるじゃねえかよ、あいつ陸上部だぜ」

「俺は自分より身長の高い女を相手には出来ないんだ」

「そーいやあいつ今日、あの集団にシメられるらしいな」

このままでは埒が明かないことなど容易に理解が出来るのだが、どうやら彼等は気が付かないらしい。

そしてそろそろ授業開始のチャイムが鳴ろうかという頃。

「じゃあ俺は、あの眼鏡の優等生を抜粋だ!」

ようやく全員が賛成する人物が挙げられた。

「爽羅と幼馴染らしいしな、破られるのも時間の問題だろうし、倫理的な問題はない!」

「俺より身長が低い、よって許可」

「そういや授業中はフルで寝ていたな、そこを襲うのがベストと見たぜ!」

彼等の視線を追えば、その眼鏡の優等生は遠くから爽羅の姿を眺めていた。子供の悪行に溜息を洩らす母親の様な姿は、彼等の性欲を大いに刺激する。

「さすが、新井田リーダー、良い人物を召喚してくれたものだ」

「普段の真面目で清楚な印象とは裏腹な身体、うはア! 想像するだけでスタンドアップ!」

「そんな可愛い子を幼馴染に持つ爽羅に俺は嫉妬ダウン……」

彼等はチャイムが鳴ってもテンションを落とすことなく、語りに語りに語っていた。

「俺達は今から、神聖なる儀式を行う」

「それに当たって、まずは己の心を磨きなさい」

「俺の心とはどこか」

「それは言うまでも無く、アレだ」

「磨きに磨き、擦りに擦り――」

「おい、みなまで言うな」

卑劣で卑猥で淫猥な彼等の欲望が、次の国語の時間の内に爆発することは言うまでも無い。

そうして授業開始のチャイムが鳴り響き、授業になることのない授業が始まる。

教室の一幕では、彼らの標的である少女がクラス一のイカれた暴力男を宥め、はたまた一幕では普段から騒がしい女子生徒が恐ろしい事を口走り、先ほどまで集まっていたはずの目立たない女子生徒の集団はいつのまにか消えてしまっていた。

教室内の淀みの一部である彼等もまた、チャイムをただの音響と捉えていた。

？

彼等は単なる男だ。

中学生の男ならば、ほとんどがあれほどの欲求を持っているのだろうが、この際問題であるのは彼等の実行能力か。

先程の女子生徒の集団でもそうであるように、人間の他人への嗜虐の有無は、結局思ったことを実行するか否かという点だけだ。

主人公は付け加える。無論、それが大きな問題であるのだが。

第三章 男子生徒による性的ないじめ (2)

国語の授業中、一応といった体で国語教師が声を上げた。

「はいはい、教科書開いてー。ページは六十二ページねー」

しかし、無論のことながら、そんな声を聞く生徒は一ケタにとどまっていた。かたや騒がしい男子生徒が机の上に座りながら友人同士で駄弁り、かたや椅子に座っている男子生徒はなにやら図画工作じみた作業をしていた。見たところ教室内の生徒の数も通常より少ないようで、このクラスで最も成績が優秀な生徒として教師間に知られている女子生徒でさえ眠りに就いていた。

この惨状を見てしても、この女国語教師は気にとめない。もしここで皆が静まるまで授業を始めないのだとしたら、それはつまり授業を行わないという意味になる。かといって、この授業ならざる状態で授業を行っても無駄な行いだと理解していても、授業自体を行わない訳にはいかない。

授業をまともに受けている生徒中にはいるので、教師は主にその人物と共に授業を行っていた。彼等にとってはある種の個別指導たり得るため、便利といえれば便利なのであろう。

「すいませーん、先生、『排斥』ってどういう意味ですか？」

比較的背が高く、整った顔立ちをする少女が声を上げた。その声のする方を振り返り、教科書黙読の作業の障壁になるその単語の意味を答える。

「あ、はい、それなら意味がよくわかりますね、ありがとうございます」

丁寧な答え、まるでこのクラスの雰囲気とは噛み合わない、教師と生徒の関係図が形成されており、このタイミングでの表現で言えば、彼女等は排斥された存在なのであろう。

そのような授業が続き、気が付けば折り返しの時間に達しようとしている。

「よし、そろそろかな、もう熟睡状態だろう」

「なんだっけ、人は一時間半置きに目がさめやすい状態になってるんだっけ」

教室の後方では、先ほどの男子生徒の集団が集い、なにやら会話をしていた。彼等の視線の集約される地点は、教室最終列廊下側の机で眠っている少女だ。

「――、――」

いびきも寝息も聞こえない彼女の睡眠は、とても心地がよさそうだ。だが、その少女を見る男たちの中身はどこまでも不快で汚らしいものだった。

「そんなこたあどうでもいい、今ならきつとあの子は起きない」

「そしてお前はきつと勃きるのだろう」

何かの掛け言葉であるかのように紡がれる冗談は、彼等の気分を煽るようだ。そして彼等はその高揚した心持のままに、その少女の背後に陣取る。

「よし、定置に付け――」

抑制された声に、各々始めから決めていた位置取りで少女の各部を押さえる準備をし、

「ゴウ！」

という掛け声と共に行動を開始した。

「――、――」

眠る少女の吐息を耳元で聞きながら、彼等は担ぐようにして運び出す。国語教師は勿論のことながら、その他騒いでいる生徒たちにも殆ど気付かれてはいないだろう。

「――、――」

少女は未だに眠ったままだった。どうやら単なる授業中の居眠りではなく、本格的な睡眠を彼女は取っているようだった。

彼等がその少女の軽い身体を担ぎ、やってきたところは、男子トイレの個室。

「へっへっへえ、こいつぁいい餌だ」

「お前は犬か、猫か、ミジンコか？」

「ミジンコって何か食うのか？」

「食うだろ、多分」

冗談を言い合いながら、彼等は呼吸を整える。どうやら彼等の冗談は、気分を紛らわす為の事だったらしい、初めての事に期待と緊張と恐怖が混じった苦痛として降りかかる。

「さて、ここで俺達には今、選択肢が与えられている」

リーダーの新井田が声を上げた。

「一、彼女を起こさずに寝込みを襲う。二、彼女を起こして起きた途端に襲う。三、彼女を起こして焦らしてから襲う。さあ、お前はどれを選択する」

ニキビが声を上げた。

「俺は無論、一番を選択するぜ！」

運動部系男子が声を上げた。

「いや、俺は三番だな！」

長身男が声を上げた。

「新井田リーダー、雨沢さんが目を覚ましました！」

そして、長身男を除いた三人が異口同音に声を上げた。

「「「し、しまったああああ！」」」

目を覚ました雨沢は、今の状況を脳内で理解しようとする。目の前には見た目の悪い男子生徒が数名、この場所は、トイレ、物の配置を考えると男子トイレだろうか。

「い、いやああああああああああ！」

そこまで理解してから彼女は、金切り声を上げた。自分が何をされるのかは分からないものの、決して良い方向には進まないであろう、そう理解しての恐怖に彼女は叫ぶ。

「おお、静かにしてくれえ！」

「しー、しー」

「お前ら、こういうときは力ずくで黙らせるのが定番だろ！」

最後に叫んだニキビ男が、少女の口を手のひらで塞いだ。手でふ

さいだ彼女の頬は、今までに体験したことの無いほどにすべすべで、触れている唇は感じた事の無いほどに瑞々しい。

「ああ……快楽」

ニキビが言えば、雨沢は汚物をみる様な眼で見遣る。

「むしろその目に興奮するということに、女性には気付いてもらいたいものだなあ」

新井田が呟いた。

「俺には理解出来ん」

「ハアハア……」

？

彼等に行動力があるという前言を撤回しよう。

彼等はただ単に馬鹿で奔放なだけだ、後先を考えない只のクズ。

主人公は笑った。だからこそ面白い、面白いんだ。

第三章 男子生徒による性的ないじめ (3)

突然、長身男子が前に躍り出た。

「さあ、俺は今から何をすればいい？」

その言葉に、別の男たちが口々に叫ぶ。

「裸踊り！」

「自慰！」

「土下座！」

「お前ら俺に何をさせたいんだよ！」

馬鹿どもは、雨沢そっちのけで話を進めていた。

だが、一段落着けば、その長身男子は近寄ってくる。

「さあて、出番だよ、女の子」

その言葉に少女は不安を募らせてゆく。自分は今から何をされるのだろうか。このバカみたいな集団の事だから、他の女子生徒のように単なる攻撃を目的としないことは確かだ。それにこいつらはきつと、限度という物を知らないだろう。

「さあて、君の裸体を拝めさせてもらおうか」

そうして男は、堂々と目的を宣告した。少女の制服に手を掛け、控える他の男を呼んで押さえつけさせる。

「っ……」

悔しがるような息を吐き出すものの、少女は無謀だということを悟り、無駄な反抗はしない。

暫くして、丁寧に脱がされた上半身の制服が、乱雑に放り投げられる。次にスカートのチャックへと手を掛け、そのまま引きずり下ろした。

「おいおい、制服は脱がしちゃ意味ねえだろ」

「せめてスカートくらいは残そうぜ」

反論の声上がるものの、彼等は互いに理解していた、結局この極地に至っては、趣味嗜好など第二であるということ。彼らがこ

のような領域に足を踏み入れたのが初めてならばなおさらである。
ブラジャーとショーツだけという無様な出で立ちへと変貌した彼女は、それでも無駄な反抗をしない。彼女には、後数分間耐えれば休み時間が来るという算段があるのかも知れない。

数秒間、少女にとっては数分間ともなる時間、淫らな男たちは、その姿に眺め入る。画面の中ではない現実の映像に心中で多分に心躍らせる。

沈黙を破ったのはニキビの男だ。

「なんとも言えねえ、眼福だ」

「これ以上を追及してしまつて構わないのかい？ リーダー」

「俺は、許可したいところだが、その前にやっておきたいことというのは無いか？」

新井田が聞くと、声が上がった。

「体勢変換を俺はやりたいね」

「おお、流石、良いことを思いつくな、賛成だ」

「じゃあ、まずは体育座りだな」

彼等は言いながら、少女の身体を拘束させる。彼女は男が何かを口に出す度に「うええ」やら「気持ち悪い」やら言っていたが、それでも反抗はしなかった。チャイムが鳴るまでどのくらいだろうか、と考える。

そうして、体育座りから始まつて女の子座り、四つん這い等を経由して、体育座りの足を尻の両横に引いた体勢に至ったところで、チャイムが鳴った。少女にとっては福音である、学校のチャイムが鳴り響く。

「おいおい、良い所だったのによお」

「いや、続けて良いんじゃないか？」

「人が来たら潜めばいい」

相談を済ませ、彼等は誰も人が来ないことを祈りつつ彼等は次の行動へと移ろうとした。

すると――

「さて、これで周囲の視線を気にせずボコれるぜ」

男子生徒の声が入ってきた。

途端、彼等の中に緊張が走る。この集団のリーダーである新井田は、その中でも努めて冷静に、少女の口を塞ぐという行動を起こした。

「周囲の視線って、さっきの女の子の視線のことか？」

彼等の会話が続く。初めに声を上げたのは、他でもない、爽羅だった。

「ばっ、ちげえよ！ んなわけあるか！」

爽羅の声を彼の物だと認識した雨沢は、彼等の集団が言った『女の子』の意味する人物を自分の事だと気が付きつつ、大人しくする。どうやらその集団は隣の個室に入って行ったようで、間もなく激しい打撃音が響き渡った。

まるで人間を殴った物とは思えない、残酷でねっとりとした音が聞こえて来る。少女はその音に対する恐怖と、自分の幼馴染の所業の現実の苦しむ。

此方側の個室内は至って静寂を保っており、隣の人間達に恐れをなしているとよくわかる。

「なんか、つまんねえな」

暫く声が聞こえず、ただの暴力タイムだと思っていると、突然爽羅は呟いた。

その声に少女がふっと緊張の糸を解して周囲の男に軽く視線を移してみれば、一人の男がなぜか体中に力を満たしてぷるぷると震えていた。

「え……」

その姿に、小さく声が漏れる。その声を聞いた他の男たちもこちらを見れば、彼女の視線の先の意味するところを知る。そしてその視線の先の男、体育会系の男は、呟いた。

「俺、我慢できねえよ」

俯いているため、どのような表情をしているのかは伺い知れない。

「俺、我慢できねえよ。ああ、ああ、駄目だ、駄目だ」

だんだんとポリウムが大きくなるのを懸命に堪えているような彼は、立ち上がった。そしてそのまま少女の正面に陣取り、

「無理だッ——」

必死に抑えた叫びとともに、己の制服のスラックスを脱ぎ下ろした。

「！」

雨沢の表情が驚愕に変わり、目が見開かれる。が、その視線も直ぐに逸らされ、見ないようにと足掻いていた。しかし、

「無理だ、抑えられねえ」

男は言い、雨沢の頭を掴んだ。雨沢の顔は無理矢理そのブツへと向けさせられる。直立のソレは、彼女が現実で始めてみる、ある種の異形だった。

「いや……」

彼女は、男がそうやって見せるという意味を半ば理解し、眩暈を感じる。

「いや、いや……いやあ……」

まるで汚物でも見る様なその目が固く閉ざされた瞬間、それは強引に、雨沢の口の中へと侵入していった。

「う、ああ……」

男は声を漏らす。しかし途中で、雨沢の口の中に入りつつも咥えられていないということに気が付き、彼は彼女の顎を押さえつつそれを奥深くまで押し込んだ。

「く、がッ……」

少年の強引な無作法によって少女の息が詰まる。その苦しみと同じに、淫らさを前面に出した男の生殖器を咥えさせられているという屈辱に、彼女は気を狂わせた。

少年は、苦しみにもがいて動く少女の舌が触れるのを感じ、さらに、少女が呼吸をしようとする働きによって吸われる、という未だかつて体験したことのない快感に浸っていた。

「んん、かはッ——」

少女は心の中で叫ぶ。

このままでは嫌だ、嫌だ、気持ちが悪い。今すぐに吐き出したい、吐き出したい、この男のモノを破壊して、気持ち悪い、このままこの物体を、物体を！

そして少女の歯牙が男のそれに突き立った。

途端、少女の口内に何か熱いものが溢れる。少女は朦朧として、それが何なのか分からないまま、その液体を口から垂れ流す。

男は、一瞬その痛みは快感なのかと思った。が、次第に現実が彼の脳内へと帰ってきて、極度の痛みという物を彼に伝える。

気が付けば、自分のそれは赤い血に染まり、歯型が見られない程に深く、深く傷がえぐりこまれていた。そこから見える肉をなるだけ見ないようにと思いつつ、それでも痛みという恐怖が彼の脳内を支配する。

半分千切れかかったそれを自分の衣服に仕舞い込み、彼はその行動を後悔する。何かしらに傷に触れることによる痛みが、彼を襲い、そしてそのまま彼は力の限り叫んだ。

「うおおああああっああっああああっああああああああ
っあああっああ！」

叫び、吹き出る血をそのままに、彼は個室から走り去って行ったのだった。

？

直幸のドアノブを握る手を回させ、爽羅の暴力の手を止めさせ、華香のバケツを持つ手を止めさせたその叫びは、この経緯を持って放たれた。

なんとも無残で馬鹿馬鹿しいこの叫びが、彼等を結合させる。

主人公は期待を膨らませながら、次の映像を見ようとした。

第三章 男子生徒による性的ないじめ (4)

「おい、なんだ、今の」

爽羅が呟いた。その声に対して、連れの男たちは、

「隣からだよな」

「どうか今誰か出てったように見えたが」
「というように返す。」

「取り敢えず見て来るか」

この言葉が、新井田達を終焉へと迎え入れた原因に違いない。

隣の個室にいる面々は、冷や汗を垂れ流し、背筋を凍り付かせる。
一人雨沢のみが気を失っているかのように伏せていたが、この光景から雨沢が被害者であることは一目瞭然だ。

そして、爽羅が、幼馴染である雨沢のいる隣の個室の中へと目を向けた。

「は……？」

第一声は疑問。

「おい……」

第二声は動揺。

「はあ!？」

第三声は驚愕。

「おい!」

最後の声は憤怒だった。

その叫びを皮切りに、彼はその個室の中にいた男たちの一人、長身男の首根っこを掴んだ。顔を近くにまで引き寄せ、無言で睨む。
その目からは「これはどういうことだ、雨沢に何をした」という言葉が明確に伝わってくる。

そして、何も言わない長身男を、

「うっだぁッ!」

彼は投げ上げた。

投げ上げられた男は奇妙な形に身体を曲げ、トイレの個室の仕切りと天井の間をすり抜けるようにして個室の外へと吐き出された。頭から墜落した彼は意識を失う。

二人目。今度はニキビ男の首を問答無用で押さえ、そのまま後ろの壁に叩きつけた。

「かはっ……」

ニキビ男から息が漏れ、彼は何も言えない。何も言えないことで、当然の流れとして爽羅の理不尽で怪力な暴力が放たれた。

「！」

怒りの一撃は男のあばら骨を粉碎し、危うく心臓を圧迫するところで止まった。その殴りを近い場所に四回入れ、そのままニキビ男の屍を個室のそとにドアから放り投げた。

そうして残された最後の一人。

「あ、あえ、えう、えあ……」

言葉にならない言葉を放ち、目の焦点が合わない。

しかし、爽羅がその男に蹴りを入れようとした途端、

「あれ、何やってるのかな？」

気だるげな声が後ろから降りかかってきた。

「……」

その声を脳内で検索し、彼は一瞬で目的の事項をヒットさせた。今日爽羅の腕に弾丸をめり込ませたり、面倒なことを問うてきたりした男だ。

「おい！ てめえも雨沢に何かしたのか？」

爽羅は、相手を実際に確認することなく、振り向きざまに蹴りを放った。しかし、その蹴りも難なく躲わされる。

「何のことかな？」

松川としては、実際に何のことなのか理解出来なかったのだが、どうやら彼のその口調が爽羅の怒りを買い、疑念を確信へと変換させたらしい。

「お前も関係あるってことは、お前を殴るべきだ。お前の方がぴん

ぴんしてるってことは、お前を先にぶっ潰すべきだ」

彼は言い、一步近づいた。松川は男子トイレのドアとは反対の、窓の設置されている方向に追い込まれる。

爽羅の仲間の面々は、松川に手を出せない。この男からは自分たちでは敵わないという威厳が感じられるのであろう。

そして、爽羅が、もう一步踏み出すと――

「よっ」

身軽な声と体捌きで、窓を開け放ち、そのまま外へと飛び出した。

「！」

爽羅の仲間に衝撃が走る。あの男は確かに、今窓から下へと跳び降りた。ここから跳び下りれば、死ななくとも骨折は免れないだろうという推測が、彼等を焦らせる。

しかし、爽羅はあくまで焦ってはいなかったようだ。

「お前、借りるぜ」

そう言って掴んだのは、新井田の襟首だった。そのまま彼の身体を押し、押し、窓枠にまで追いやる。

「どうせお前も俺に殴られる運命だったんだから、いいよな？」

爽羅はその人間の上半身を窓枠から出した。

彼はもう関係ないと言った体で、踵を返し、自分の幼馴染の元へと戻ろうとする。

そして、爽羅の仲間たちが注目を集める中、新井田は――

窓の外へと吸い込まれていった。

？

この時点で三人の人間が重傷を負ったようだ。

主人公はその事実を確認して、笑った。

第三章 男子生徒による性的ないじめ (5)

窓の外へと飛び出した松川は、新井田が窓枠から顔を出させられるその瞬間には、すでに窓の上にまでよじ登っていた。

身軽に壁のくぼみや配管、窓のサッシなどを経由し、彼は壁を闊歩する。

そして、松川は窓から爽羅が顔を出すだろうと推測していたために、窓から出てきたその頭を一閃、己の自由落下に任せて蹴り落としていた。

「！」

蹴り落とされた新井田は、驚きに息を飲むので精いっぱいだった。声を上げることすら許されず、ただ己の降下に恐怖するだけだ。

しかし、目の前にコンクリートが狭り、己の顔がただの肉塊と変貌するのは時間の問題だろうと諦めていたその時、突然視界が上へと向けられた。

「やあ」

その視界の中心には、必要以上に近付いた男の顔がある。

さきほど爽羅の後ろから顔を出して、彼を激昂させた男だ。

「君、何をしたのかな？ いやいや、別に僕は爽羅の仲間というわけではないんだよ。だけどさ、女の子があんな無残な姿になっているところを僕が見て、君が何をしたのか知りたくなるじゃないか」

彼の口調はどこまでも温和だったが、なにぶん今の体勢が体勢だ、新井田が落ち着いて話を出来るはずもない。

彼等は今、先ほどの男子トイレから数メートル下の壁に垂直になる様な体勢になっている。松川が左足で壁のくぼみを踏み、さらに左手で配管を掴んでいる。右足は新井田の足をひっかけるように捉えており、彼の胴体を支えているのは松川の右手だ。

そんな人間離れたバランス力と筋力と度胸で、彼は目の前の男に問いかける。

「ほら、言ってみろよ、何をした？」

口をぱくつかせ、目を回している。

目の前の人間が、話をしたくないのではなく、ただ単に動転していているだけだということは松川も理解していたが、彼は容赦なく拷問を続ける。

「僕はね、僕達中学生男子がどうなるうが構わないって思うんだ。けどね、僕たちの親に心配を掛けたり、はたまたあらゆる世代の女の子を苦しめたり、そういうのはいけないと思うんだよ、わかるよね？」

言って彼は、新井田の身体を揺らめかせた。新井田は今にも頭から落下するのではないかという恐怖と共に、目の前の人間の言動の矛盾に対する混乱を抱いていた。

「え、あ、お、俺……は」

日本語とは言い難い言葉が口からようやく出て来る。

「ああ？ 何かな？ 聞こえないよ？ 話したくないの？ いやあ、僕は別にいいんだよ、話さなくなたって。君が何をしたかを知る方法を僕は持っているからね、まあ、友人の手を借りる訳なんだけどさ」松川は人間を揺らしながら、「僕はただ、今君に対して突発的な怒りを感じているだけなんだよ。君を死なない程度の苦しみに至らせれば、それで僕は満足なんだ。さっきの女の子が味わった苦しみ以上の苦しみを、君が感じればね」

人間の揺れが鉛直方向に対して九十度に達しようとしたその時、松川は新たな行動に移った。

「ほらよ」

軽い掛け声と共に、彼はその人間を上方へと放り投げる。とはいっても跳んだのは数十センチ程度の物で、新井田はすぐに重力加速度に囚われた。しかし彼はその体を落とすことなく捉え、肩に担いだまま配管を上へ上へと登って行った。

まるでジャングルの木の屋根を跋扈するチンパンジーのようにも見えるその姿は、人間離れという要素と共に新井田への恐怖を増加

させる。激しく振り回される彼の脳はおおよそ思考という物を許されていないだろう。

そして、

「到着だよ」

という軽快な言葉を聞けば、彼等は既に屋上の縁にまで来ていた。「あ……」

小さく声を漏らすことしか許されない新井田は、はるか遠くにと見えるコンクリートの地面を視界に入れる。ここから落ちたらどうなるのか、という映像のみが脳に映える。

「まあ、君を死なせたりはしないさ。もしかしたら発狂して死んでしまうかもしれないけど、そんなことが無いように善処するよ」

言って松川は、待つことなく、そのまま堕ちた。

「う、うわああはあああ！」

新井田の情けない叫びが轟く。ジェットコースタに乗った時の身体が浮く様な感覚が彼を襲い、アトラクションとは異なり、死を傍に控えた下降が彼の意識を消し飛ばしてしまった。

彼は新井田を担いだまま、跳び出したトイレの窓の上にある配管と、同時に壁の窪みに手を伸ばした。確りと掴み、振り子の要領で窓の縁に着地する。人間二人分の重さの為かその配管が外れてしまったのを彼は特に気に留めなかった。支えを失くしたにも関わらず、彼は元の場所に舞い戻ったのだった。

？

あいつの身体能力は超人的だ。

そうは言っても、ただ小さい頃から木登り等に励んでいただけであろう。

それでも、素晴らしいものは素晴らしい。

主人公は自分の知人を褒め称えた。

第三章 男子生徒による性的ないじめ (6)

爽羅が雨沢のいた個室へと入ると、彼女は朦朧とした表情で彼を見ていた。

極度の屈辱と苦しみを感じた彼女は半ば発狂し、また、口の中に広がる血の匂いと味に酔っていた。

「雨沢……」

爽羅は呼び掛けるが、彼女は答えない。

目を開けていても、どうやら殆ど物を見ていないようだった。

「雨沢、大丈夫か」

彼はそれでも語りかける。

「取り敢えず、口の中を綺麗にしないと」

彼は暴力に酔いしれる人間だったが、この少女に対しては優しさを見せるらしい。彼女をお姫様抱っこの要領で担ぎあげ、水道へと向かった。

「ほら、うがい、しろよ」

水道の前に立たせ、促すも、彼女は何も返答をしない。気が付いてみれば彼女の顎はガチガチと震えていた。

「仕方ねえな」

その情けない姿を見て、彼は何を思ったのか。

彼は、水道水を口いっぱいに含み、そのまま彼女の唇を自身の唇で覆った。

「！」

少女の目が再び、驚愕に見開かれる。

彼女の表情など見えない爽羅によって彼女の口内に水が侵入してくる。彼は水を送ったり吸ったりを繰り返しつつ、無作法にも彼女の口の中を綺麗にしようと勤めた。

そして一通り、彼は水を吸い、吐き出した。

その吐き出した水の中には、多分の血液と、少々の肉片が混じっ

ており、爽羅は、雨沢が何か人間の皮膚を噛み千切ったのだと理解した。

「ひでえな」

呟いて、再び彼は水道水を口に含み、同様の動作をする。

次第に雨沢の方も意識を取り戻していったようで、しかしながら彼女の別な意識は反比例的に朦朧としてゆく。

――爽羅君、君はやっぱり暴力的に育ってしまったよ。

――爽羅君、君はやっぱり強引過ぎるよ。

三度口をゆすいだ所で、雨沢が呟いた。

「爽羅、君……」

その呟きに、彼は答える。

「ごめんな、ごめんな」

ただ、謝罪の言葉を。

彼が言葉を発するたびに、雨沢の身体は小さくなってゆくように感じた。その体を抱き寄せて、優しく、優しく丁寧に撫でる。

彼女からは涙は出ていない、全てに失望した境地に至ったかのような悲哀が、ただ口から言葉として漏れ出て来るばかりだった。

しかし、そんな時間は突如として、強制終了させられた。

ドサツという無遠慮な音と共に、先ほどの男の声が聞こえてきたのだ。

「やあやあ、僕のやらんとしていたことを見透かすなんて、流石だね、君は。でもまあ、おおかた彼も暴力大好きみたいだし、制裁されて文句はないんじゃないかな？」

暴力的に投げ出されたのは、人間。

残念ながら松川の言うこととは異なり、この人間、新井田は爽羅のグループとは別だ。しかしそれでも、爽羅の中には、松川という人間に対する怒りが溢れていた。

彼は一歩近づく。

後ろから「爽羅君……」という呼びとめる様な幼馴染の言葉が聞こえたが、彼は後ろ髪引かれる思いを残しつつももう一歩足を踏み

込んだ。

「さて、君も僕に反抗しようというのかな」

松川は挑発するように言った。

「だけど、多分僕には勝てないんじゃないかな？ 君は見たところパワーに溢れているけど、僕は身軽さに自信があるからね、場所によれば絶対に負けない」

細められた目を見て、爽羅は不思議とにやりと笑っていた。

「面白い、いいじゃねえか。俺がお前に負けるだど？ おもしれえことを言ってくれるよ」

その笑みが固まった瞬間、彼の視線は松川の軽々しい笑みを捉えていた。そして気が付けば彼は跳び出していた。

「ま、頑張って」

無論、松川も跳び出していた——再び窓の外へと。

？

暴力に生きる様な男を幼馴染とし、彼に愛情を向けられたあの少女は幸せなのか。

それは少女にしか分からない事だが、もしかしたら少女も分からないのではないだろうか。

ただ一つ、これだけは言える。

この結果を彼女は決して望んではいなかった、と。

主人公は、物語の強引さと無情さを思い、喜んだ。

第三章 男子生徒による性的ないじめ (7)

「おし、追うぞ、お前ら」

爽羅は、自分の仲間たちにそう声を掛けた。言われた側の彼等は、あからさまに躊躇しており、付いていくかどうか迷っていたのだが、爽羅は構いもせずに、早くも窓の外へと出てしまっていた。

「くそ、行くしかねえな」

一人が呟けば、他の面々も次第にその意見に賛同を始める。そうして彼等も、固く冷たいコンクリートの待ち受ける絶壁へと跳び出したのだった。

この学校の壁は案外上りやすい。外へと飛び出した者達が一番にそう感じた事であろう。無駄に複雑に配管されている水道管が足場となり、古ぼけてざらざらとした壁面に、所々見える溝が、摩擦による静止を可能にしている。

爽羅の連れのメンバーが上を見上げた時には、既に二人の戦闘が開始していた。

「おお、おもしれえ」

愉快そうに呟いたのは爽羅。対して松川は、

「そうか？ 僕にとってはこんなの暇つぶし程度なんだけど」

余裕の表情でいた。

爽羅が、上方にいた松川を下から突き上げるように敏速に登れば、松川は右へと跳び、ブランコを九十度傾けた様な軌道で彼の攻撃を回避する。避けた後の対処も秀逸で、確りと足元を捉えたと思えば、間を置くことなく爽羅を見ていた。

「くそ、すばしっこい奴め」

「昔から、こういう身軽さには自信があったからね」

しかし、気が付けば爽羅の仲間も、手慣れてきたように松川を捉えていた。

「あれ、一对複数は卑怯じゃないかな？」

松川は軽々しくそう言うと、軽々しく壁面を跳ねた。

その姿を上下から襲う爽羅達は、容易に回避されることで無駄な体力を浪費し、既に限界に迫ろうとしていた。松川はその男たちを見て、どうしようかを考える。その結論は、

「まあ、こんなところで長居してもあれだから、大人しく堕ちてもらうことにするよ」

という残酷な物だった。

瞬間、爽羅を除いたメンバーに怖気が走る。しかし、その怖気を感知する頃には既に現実が降りかかっている人間が一人いた。

その人間は、一瞬自分の手が滑ったかと錯覚した。だが実際には、外されたのだ、松川の描く美しい手捌きによって。そうしてそのことに気が付く頃には、重力加速度が彼に等加速度の運動を与え始めており、その人物の脳内も振り乱されていた。

「お疲れ様」

その眩きが聞こえてきた頃には、その人間の眼前にはコンクリートが映えていた。しかし、なぜその言葉が聞こえたのか、なぜ自分は落下しているのにもかかわらずその言葉を聞き、そして未だに地に着かないのだろうか。

そのような思考も、存在することが無意味、ただ松川は、落着寸前のその体を、足を掴むことによって取り押さえただけだったのだ。この手を放せば、男は脳天からコンクリートに突き立つ。そして松川は、容赦をしない。

「うあああああああああああ！」

男が意識喪失を目前に控えているということを、恐怖に満たされた脳の内を理解し、更に迫るその恐怖に叫び喘いだその瞬間、松川は手を放した。

低く鈍い音が響く。実際の所、落ちた距離は数十センチ程度だったのだが、人間の意識を飛ばすには十分の高さだった、ましてや脳の錯乱が既に植えられている。

そして、松川は上を見上げる。

見上げられた男たちは畏怖の目で彼を見、動けない。いつこの猛獣が自分の足を引っ掴み、川底へと沈みこめるのか、川を渡る草食動物の様な面持ちで彼等は見下ろしていた。

そしてワニは駆け出す。

しかし、その視界を閉ざす物が上方から降ってきた。

「は？」

彼は思わず声を漏らす。

メタファアの通りであれば水など構いなのであろうが、あいにく所詮は比喻であり、彼は降り注ぐ水の中を泳ぐ術を持ち合わせてはいなかった。

振ってきたのは、大量の水、それも水道水だった。

「お、おいおい、何これ、あれ、俺、運に恵まれたのか？」

爽羅は、その光景をみて不可思議に思い、ただ事の成り行きを見守るのみだった。この水は彼の仕組んだ事柄では無く、先ほど松川が破壊した水道管によるもの、要するに彼の自滅だったのだ。

「ちっ」

松川は舌打ちをする。全身を水にまみれさせたその体は、衣服に水が染み込み重く、手元や足元が滑りやすくなっている。このままでは先程までの縦横無尽な駆け回りを披露することができない、彼はそう判断し、水の降り注ぐ男子トイレ下方から何とか抜け出し、そのまま注意を払いながらよじ登って行った。

そしてその向かう先は、

「はあ？」

爽羅の意表を突くには十分の場所だった。

松川は登る勢いのまま、ガラスを蹴破る。

女子トイレの窓のガラスを。

？

これで、彼等の暴力は交錯した。

ここまでの流れを掴み、楽しむ主人公は、伸びをした。
この後に更に面白いことがあることを知っているかのように思う。
——さあて、どうなるのかな。

第四章 女子生徒による性的ないじめ (1)

二時間目の休み時間、前回の休み時間に無視を決め込んでいた少女が不敵に笑う。

「じゃあさ、あの子、真奈美ちゃんの胸を十回揉んできてよ」

彼女は手を腰に当て、自分自身よりも背の低い少年を見下ろしていた。対する少年はその意味を理解出来ずに一瞬固まるが、その後には表情が焦りへと変貌する。

「え、ええ？ ええっ！」

驚いたようなその声が、消えぬ幼さを持って彼女の鼓膜を揺らす。

「うん、その驚いた様な声が凄く可愛いわ」

すると一転、少女は悦に浸る様な表情で少年の頭を撫でまわす。

どこか恍惚とした表情に混じって満足そうな感情が混ざり、その手を置いたまま少年の次の言葉を聞く。

「そんな、可愛くなんてないよう」

少年も少年でおかしな返答ではあったのだが、少女はそれを気にすることなく、

「はは、とにかく、私が命令した通りにして頂戴」

と、先ほどの話題を続けた。

少年は言われた言葉を思い返し、頬を赤く染めつつ、

「うう、そんなの真奈美ちゃんにわるいよう」

と、困ったような呻きを上げた。それでも少女は自分の意思を貫き通すようで、その少年を脅すという作戦に出た。

「えー、やってくれなかったらさあ、また放置プレイの回到来だよ？」

どうにも不可思議な脅し文句なのだが、少年にとっては効果抜群の脅しだった。なぜこれが脅しとして成立するのかと問われれば、彼女等の放置プレイの意味するところが、実際一般的に認知されているものと大きく異なるからという理由で済む。具体的に言うなれ

ば、少年を全裸にして拘束し、その姿をこのメンバーが見つめるだけという、つい一週間前に行われた物を例に挙げよう。

少年はその一週間前の苦痛を思い返し、板挟みの状態のまま首を縦に振った。

「ええ、あれは、本当に恥ずかしいから、いやだよう。だから、うん。行ってくるよ」

その返答を見た少女は、頭の上に置いていた手を離し、少年の方を掴んで一回転、彼の背中を押した。

「それじゃあ、行つてらっしゃい、感想待ってるからね」
「う、うん」

暫くして、少年が帰ってきた。

「どうだった、どうだった？」

一番手に声を掛けたのは先程の少女で、それに載る様に他の少女も声を上げた。

「どうなの、柔らかかった？」

「私には無いものだから、詳しく聞きたいの！」

「どう、流石の君も嬉しかった？」

その期待の眼差しの集合体から視線を逸らし、少年は、

「う、うん、柔らかくて、ぷにぷにとしてて、なんというか、なんという、か……」

顔を真っ赤に染め上げてしまひには黙りこんでしまった。

そして少女は、その身体を、

「ああ、やっぱりだいちゃん可愛い！」

と言ひながら抱きよせたのだった。

「ふ、ふわぁ！」

と、男らしからぬ声をあげ、羞恥に染まる彼。周囲に陣取る女子生徒も同様に、まるで最愛の弟を可愛がるようにしていた。

「可愛いよお！」

「私も撫でたいーっ！」

すると輪の中心の少女は彼を解放し、新しいことが思い浮かんだ

ように人差し指をピンと立てた。

「いいこと思いついたわ!」

その笑顔と共に発せられた言葉を聞き、少年は不安を顔の表面に張り付け、他の女子生徒達は喜びを露わにしていた。

「なにになに?」

「聞かせて!」

「楽しみ!」

そして、彼女は朗々と叫んだ。

「王様ゲームなんてどうかなっ!」

この叫びがクラスの一部に影響を与えたとも知らずに、彼女は言う。

「王様になった人が、他の人を言いなりにできるって、本当に甘美な話じゃない!」

「うん、良いと思う!」

「すごいすごい!」

どうやら話は即決したようで、少年を無視した彼女はゲームを始めた。しかし、彼女等のルールは本来の物とは大きく異なる。

「じゃーんけーんー!」

彼女等は、唐突にジャンケンを始めたのだ。

「ポイツ!」

チヨキ、チヨキ、チヨキ、グー。輪の中心の人物でない少女がこの試合は一人勝ちをした。そして彼女は高らかに宣言をする。

「やったー、それじゃあ、二番目に負けた人が、だいちゃんにおっぱいを吸われる刑!」

堂々と宣言して、少女は不敵に笑む。その言葉を聞いた残りの三人は、再びじゃんけんを始めた。そして、二番目の負けだったのは、輪の中心の少女だった。

「やったわ! ああ、なんて楽しみなのかしら!」

なぜかとても機嫌よさそうに、彼女は笑う。

そうして彼女等は、少年を引きつれて女子トイレの個室へと向か

った。

？

中心人物となっている少女の名は、若菜^{わか}だったか、そして、対象となっっている少年の名は、大也^{だい}だったか。

彼女等のいじめの特徴は、あくまであの少年を好いているということだ。

どの程度に好いているのかはともかくとして、彼女等は身体を少年の為に駆使しかねないほどに彼に好意を抱き、そのうえで彼を虐めているのだ。

そして彼は、その境遇をもししたら嫌がっていないのかもしれない。

主人公は自分なりの推測を試してみた。

第四章 女子生徒による性的ないじめ (2)

「さあて、そういうわけでやってきました！」

誰に言うでもなく実況をした若菜は、大地の頭の上に手を乗せた状態で、蓋をした様式トイレの便座の上に居座った。

「いえーい！」

その声に周囲の女子生徒も喝采する。既に始業のチャイムが鳴っているが、どうやら彼女達は授業に出るつもりはないらしい。

「で、なんだっけ？ 罰ゲームは、私が吸われればいいんだっけ？」
彼女は、罰ゲームを受けることを心の底から歓喜しているように言い放ち、そのまま自身の制服の上半身を脱ぎにかかった。

「う、うわあ、そ、そんなことできないよう！」

すると大地はそれを咎めるように言い、手で止めようとしたのだが、

「あれ、だいちゃん、脱がしてくれるの？ なんて従順な子なのかしら」

どうにもこの少女たちのノリに逆らうことはできないらしい。

「ええっ、そんなことできないって！」

と反論を記すも、彼女にはその言葉は通じない。結局自ら衣服を脱ぎ去り、薄っぺらな裸体を少年の前に晒した。

「ううん、やっぱりはずかしいわあ」

恍惚とした表情を浮かべながら、若菜は身をくねらせる。その両手は既に少年の身体を拘束しており、罰ゲーム以上の事態になっているのは言うまでも無い。

「ささ、はやく、く・わ・え・て？」

少年を誘惑するように言った少女の身体はその言葉ほどの魅惑もない程に平坦なのだが、気にすることなく、強引に少年の顔を自分の胸元に埋めた。

「う、うわあ、ん、だめ、だよう」

少年が声を上げながら反抗するも、少女の行動は止まらない。

「ほらほら、しっかりしてよ、だいちゃんは男の子なんでしょ？」

「そ、そう言われてもお……」

少女の一方的な気持ちの高ぶりは、留まるところを知らない。周囲からの友人の視線も相まって、少年、少女ともに羞恥による快感が増してゆくばかりだ。

「ん、そうそう。ああ、気持ちいいわ、そんな感じで、もっとやって頂戴」

頬を赤く染めつつとろける様な表情をする若菜は、少年に不本意の行動を一方的に行わせ続けた。少年も仕舞いには言いなりになっているかのように思え、きつとさきほどの脅しは未だに有効なのであろう。

「はあ、ん、す、すごくいいよ、だいちゃん」

そうして暫く時間が経ったところで、突然、別の少女が声を上げた。

「はいはい、ここまで」

「いやあ、十分なんてあっという間だね」

どうやら彼女に対する罰ゲームが始まってから既に十分以上が経過したらしい。

「ええー、もう終わりなの？ 残念だなあ。じゃあ、次やりましょ」

若菜は切り替えを早くも、第二回戦を開始した。

そうしてジャンケンに勝利し、王としての権限を手に入れた彼女は、

「じゃあ、三位とだいちゃんが、十分間見つめ合って！ もちろん、全裸だね」

という不可思議な命令を下した。

しかし、そんな指令すらも彼女達は受け入れる。

「おっけーっ、任せて！」

何を任せるのかという疑問すらなく、事は進行してゆく。

今回のゲームでは、羞恥に悶えるのは少女の側であるべきなのに

もかわらず、少年の側が絶えず恥ずかしそうに、頬を赤らめていた。その姿を見た少女たちが発奮したのは言うまでもなく、少年はある種の遊び道具と化していた。

そうして早くも、授業時間である五十分が経過してしまった。

「えー、もう終わりー？」

チャイムの音を聞いた少女らが声を上げると、大地の表情が心なしか安堵に溢れたようにも見受けられた。しかし、そんな少年に追いつく打ちを掛けるように、

「じゃあ、最終ゲームだね」

と、若菜は言った。

？

残念ながら自分には理解が出来ない。

何が楽しくてあそこまで過激な行いをできるのか。

主人公は頬を引きつらせながら感想を述べた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6992s/>

W.C. ~War Closet~

2011年9月10日03時16分発行